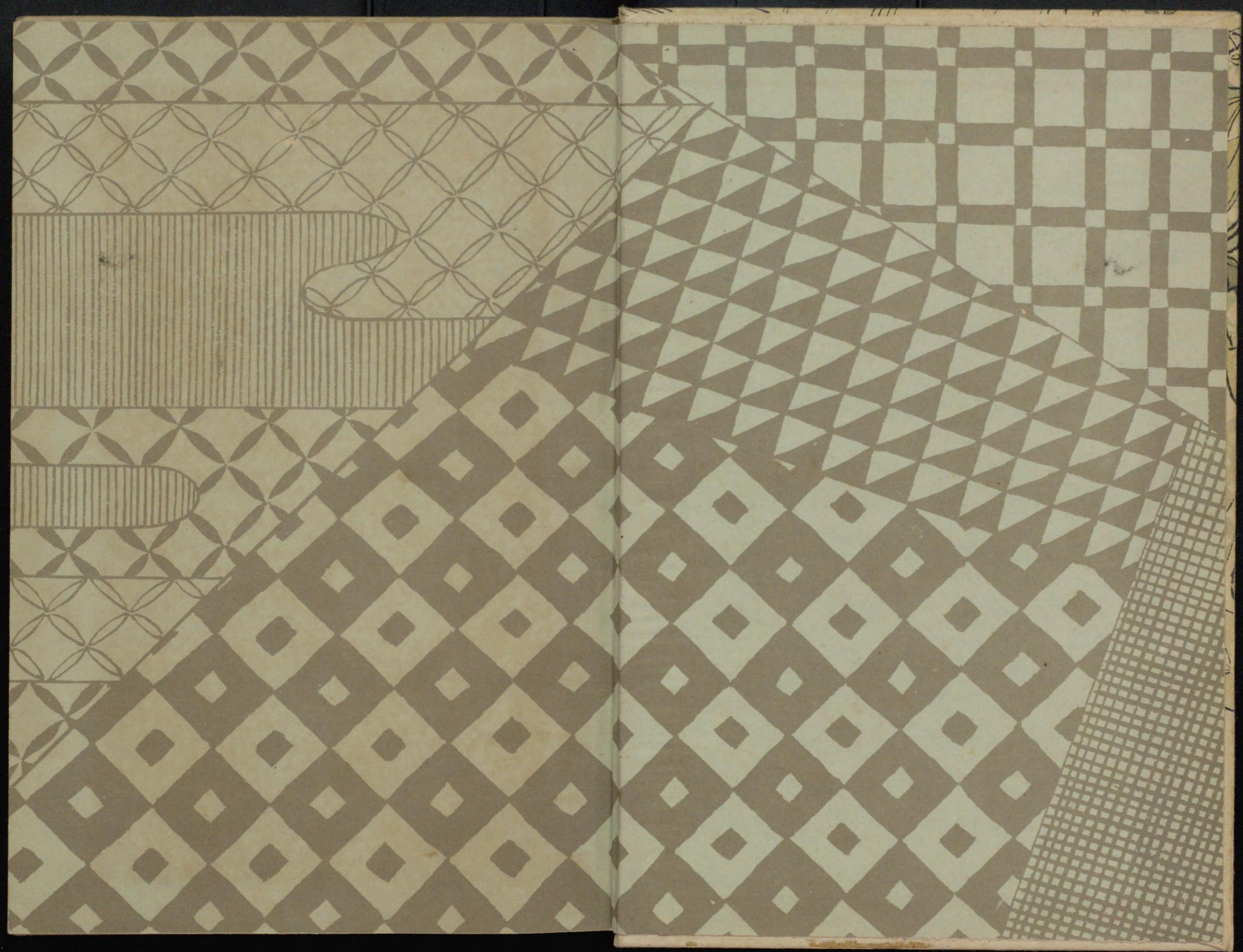
629-41
1200700597852



江戸っ子

萬魚著

江戸っ子

鳥魚著

序

爐邊の夜話の積りで、思ひ付くまゝに云ひ試みましたが、何にしろ日本橋在十三里のお生れだけのもの、本場にも場違ひにも其の邊は先刻失敬してゐる、決して江戸前鰻は、どこで捕れたのですか、などゝは申しません。その代り次から次へと着け込んで、嘘なら八百冊、ほんとに大きな江戸讀本に仕立てゝ見たい心持もある、さうして讀み手があるか、ないかと聞くには及ばぬ、それは私の知つたことでない、知つてゐる限りを、何も彼もブチマケて見たいばかりさ。

昭和八年その月その日、鉢から下した福壽草が、貧乏人の庭に黄金色を見せた處で

國立國會圖書館藏書
I種
W
1200700597852

江戸ッ子の話

目次

櫻田と神田……一
十里四方、江の戸、
新市街の三百町……四
海面埋立、城下町、郭内郭外、町奉行支配、惣廻り、江戸の田舎、
江戸向と地廻り……一一
下町、大川の向、土一升金一升、九尺店、
一住ひ三坪二合五勺……一四
家持町人、町役人、地借、家主、九尺二間の裏店、家賃、お長屋の突合、
百文以下の小賣……二〇
百相場、米の擔賣、勞銀、三文利、
八州を以つて天下に抗す……三一

關東の抵抗力、將軍樣の御膝元、江戸出來の浮世草紙、剛勇禮讃、市川團十郎、
誰が芝居を喜ぶか……二八
五代將軍の生類お憐、武士を嘲弄、平民文學とは、資産ある平民、
惡對趣味に耽る……三二
地主級、芝居見物階級、我儘娘、脚本で見せるのでない、女が多い、ツラネ、
芝居から附景氣、
城下町人の擡頭……三六
城取の變革、太閤の大阪築城、貨幣性能、物持と金持、虚威と實力、婆婆ッ氣、
男立狂言の流行……三九
寶暦以降、曾我兄弟の惡對、酒落本よりも中本、一調子二フリ三男、
凄じい芝居の煽り……四四
何でえベランメエ、江戸ッ子の元祖、無事に見えた外面、
下方あつての所作事……四八
ヂミなところへ派手、歌詞の説明、遊女町を包容、情死より駈落、豐後三派、
町々の稽古屋、踊の師匠、團者、旦那取、茶番身振狂言、御殿奉公の條件、世
の中が芝居の眞似、
生世話物の半天着……五六
四代目小團次、生世話と眞世話、幸四郎菊五郎、慶應二年の法令、興行政策、
町人萬歳の叫び、
武士當りが惡い……五九
喧嘩と醉倒、鳶の者の團體、リヤンコ、旦那賃、無料より高いものはなし、
鼻ッ張の限度……六五
元正間記の間違、寶永六年の制札替、
役人に降る瓦礫の雨……六八
藤掛式部を襲ふ、厄神送り、辻番所を壞す、露骨な内閣乘取、
差迫つた暴動挑發……七三
高間騒動、天明の打壞し、
人並な息子は惡少……七七
店借り悴、お祭りに痩我慢、無宿居候、
元日に漸く松飾り……七九
町人の眞似、武士は窮屈千萬、諸大名の遣繰り事務所、

仕送用人や質屋通ひ……八一
なか〳〵の手腕家、內職の前借、
酒屋の御用が來ない……八三
御用聞が逃げる、町人憎み、
日本中の手本……八五
將軍樣の御威光、阪東武士の遺風、秀吉の小田原征伐、
町人能の狼藉……九〇
御本丸大廣間の南庭、町奉行が世話役、やゞ親玉、半彫の刺靑、
お袋の腕に親仁の名……九三
薩摩勢の彫り物、遊女のさま命、
思ふ女の紋所……九五
替名替字、字から畫へ、
强がつた相撲風俗……九八
若い者の心中、廓の喧嘩、過去帳男、
人嚇しの死次第組……一〇一

近松の油地獄、六字の名號、刺靑をする人柄、籠字、
見せ附けた男自慢……一〇三
江戸の刺靑、牢屋入は手柄、大肌拔の力味、上方の達衆、東照大權現、
歌右衞門の刺靑人氣……一〇七
倶利伽羅太郎、團七九郎兵衞、國芳の百八豪傑、
お大名樣の彫り物……一〇九
內田伊勢守、出羽樣の隱居、
山の手下町刺靑競べ……一一〇
辰巳屋の悴が江戸一、その上がある、
宿場女郎に蟒お由……一一三
文化八年の法度、天保改革、七人廻のモデル、雷おしん、
男とは武士のこと……一一五
江戸の艸分、浪人筋、
浮氣な旗本奴……一一七
鶺鴒組よしや組、賴房利常、絲鬢猿眼、

供を割らせない方法……一一八
張臂、槍持の姿勢、歴々の奴、町奴は武士の眞似、
有徳人の若い悴……一二〇
闕人、白髪頭の男達、華魁の振臂、山の手風殿中風、
家光將軍の物數寄……一二三
奴左近、躍上覽の日、井上筑後守の諫言、男色と躍、
奇拔な小田原風……一二六
かぶき者、刀の寸法、一尺八寸、長脇差、
尺八をさす俠衆の腰……一二七
和泉風呂の久助、懐中劍、二尺七寸の烟管、米さし、米河岸の若い者、
材木屋は寛文に轉業……一三〇
白木屋、柄の長い燒印、
伊勢町小田原町……一三一
河岸八町、本米問屋、地廻米問屋、奥州米、大阪商人が藏元、魚河岸の地字、
諸大名の拂が惡い、現金掛直なし、新場、御肴御用、

諸侯の活鯛献上……一三六
家宣の精進落ち、一日一萬兩、大湊の天狗源内、
享保には路面乾く……一三七
小田原町の景氣、活鯛獻上無用、草履穿き、
九間一丸を躍船……一三九
あづまをどり、淺草の大茶屋、
伊左衞門とは違ふよ……一四一
月夜の利左衞門、小多喜權兵衞、鐘彌左衞門、
喧嘩入用の積立……一四五
死生知らず、遠海物近海物、
新場の初鰹の景氣……一四八
夕河岸、中ぶくら、江戸前、初鰹の直段、人氣の衰へ、
北條氏綱が擔いだ……一五一
軍船へ飛込む、松魚賣の文句、勇商人、見立繪、
神田祭の文句を見よ……一五六

蜂須賀阿波守の娘、加賀鳶梅吉、松山、
火消屋敷の殿様……一六〇
信綱吉宗定信、由井正雪の謀反、奉書火消、定火消、十人火消、町火消、
消防の三番組織……一六五
京都移し、水の手、玄蕃桶、
ガヱンと町鳶……一六七
十組附渡り、仕事師、火を呼ぶ、町内の若い者、
鳶の者の資本主……一七一
旦那場、警察の不備、落語の若旦那、
火事は江戸の花……一七三
勞銀一杯の暮し、夜逃げ、
大罪は遠國他國者……一七五
私娼の窠主、博奕打の頭分、アバレ者、
大通は笑話の資料……一七八
二廻りの藥喰、日和下駄、大口屋曉雨、明和の謎、キヤン、

奉公人聯盟の張本……一八四
大鳥一平、腕ッ節の強い仲間、俄大名俄旗本、奉公人を手討、
大鳥一平組の活躍……一八九
若黨を斬る、一命を棄てる義理立、柴山孫作、
高割人足の請負業……一九二
幡隨長兵衞、小普請役、杖突、百石に二朱、割元、寄り子、慶安寛文の三十年、
きほひ組の勃興……一九九
幕府の小普請方、常傭人夫、徂徠の政談、所々の狼藉、
男達は不評判なもの……二〇三
延寶八年の町觸、こつぱぎほひ、お經の代りに惡對、通り者と大通、足駄組、
粹と通り者……二〇五
京と江戸、博奕打の別號、傳法肌、
白無垢鐵火となる……二〇九
木材木町の七郎兵衞、おそう吉三郎、金看板甚九郎、山師川師、
本所の道源およし……二一六

店頭、甲州屋路地、一燈四文、長屋の防ぎ役、
小女郎源四郎……二一八
三文商内、大橋の店頭、
店頭は一年千兩……二二〇
深川六場所、飯賣女、平旅籠、お構場所、町奉行の妾、カヂヤ金、
切支丹一揆の詩負……二二五
鞘町の水鳥問屋、東國屋張り、
天狗除のお守……二二六
ましや長門、吉宗將軍の御氣に入、名人を三人、
新場の九郎兵衛……二三〇
肴賣の八、皆あの通り、
通り者もいろ〳〵ある……二三一
尼崎一湖、二度催促に來る、怒られて仕合、
即金で打壞す……二三四
十八大通、札差の利倉屋、男達の眞似、
空元氣の下駄組……二三五
藏前本多、吉原から積物、晴天に下駄、
本多忠勝の遺風か……二三七
小田原町から、前七分後三分、紅襦袢、
河東節や四時觀……二四〇
御納屋の天滿屋、白雲杉風、紀逸川柳、地口歌五目歌、
威勢のいゝ木遣……二四二
全盛操花車、木遣石引、盆踊の音頭、張り込み、
ヂヤンと鳴つたら……二四五
赤い風の煽り、喜田川守貞、キヤア〳〵、
思ひ出す大津繪……二四六
七十年前の唄、專業の消防夫、御見舞火消、
ガエンの空出……二五〇
錘付の頭巾、生命賭け、男振を揃へる、丸太枕、太皷と半鐘、錢緡賣り、
幡隨院長兵衛のセリフ……二五四

土手組、百五十二組、御職、町内入用、……二五七
家齊將軍が聞惚れた……
雷門の再建、安國殿の普請、木遣師の名人、西丸の火事、町鳶が五百人づゝ、
西丸火事の殊勳……二六〇
本丸の火事、遠山左衞門尉の取計、い組の伊兵衞、
流行唄の歌ひ手……二六二
土手節、伊豫節、いなせ節、木遣くづし、仇ッぽい、歌澤、は組の頭、江戸ッ子の見物人、
主從關係と雇傭關係……二六五
二半場、日雇、譜代の家來、武士は頭が上らぬ、貨幣の天下、農民の動き、
幾度もする間食……二七〇
いゝものでない、食物への影響、食擇み、
町料理、惣菜料理……二七四
庖丁家、洲崎の枡屋、會席料理、卽席料理、
屋臺店と繩暖簾……二七六
飲食物の辻賣、寶暦前後から、アフツキリ、芋酒、炊出、ヤタ一、昔の食堂、
安賣番附の食品……二八一
天保改革、江戸久居計、中汲、
茶漬屋は上等食堂……二八四
十二文、宇治の里、骨拔泥鰌、鯨汁、
鰻丼の發明……二八六
大久保今助、三百文から四百文、割箸、
蕎麥屋の繁昌……二八七
夜中の荷賣、蒸蕎麥、二八卽座けんどん、御膳そば、蕎麥屋の道具、皿盛大平盛、ぶつかけ、
甘汁は愚痴……二九一
江戸汁、三浦屋儿帳、馬方そば、庵號、蘭麪、
種物の代金……二九六
蕎麥撰み、小石川のそばや、
奢りに往く風習……二九七

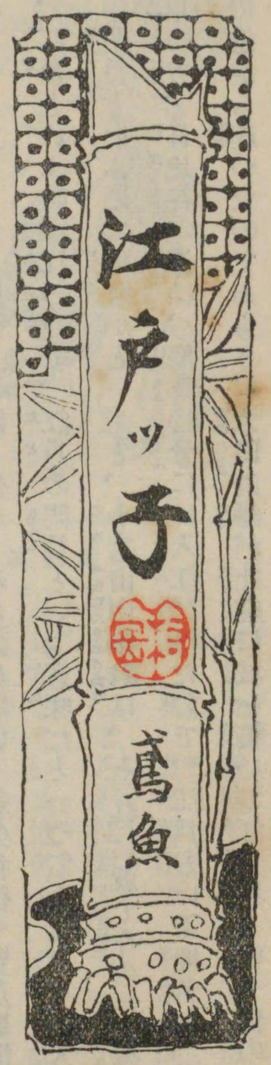
引拔、賃銀値下の禁令、手拭と下駄、鮓屋、お稲荷さん、釣瓶鮓、立食ひ、
金鍔やら大福餅……三〇一
餅菓子、象饅頭、大福餅、金鍔燒、おかめ團子、桃太郎團子、
鐵炮玉に密豆……三〇四
トウケイとトウキョウ、東京ッ子、捜しもの、跡見花蹊、キナ子にアン子、
奥さんに旦那、女學生の言葉、黑砂糖、鮪の大漁、テツカ卷、
裏店住居の人々……三一三
長屋、『わよ』の出處、何誰店誰、鍵錢釣瓶錢、お祭の赤飯、町內入用、
寛政時代の勞働者……三一九
東ッ子、自由勞働者、教育費軍事費、鳶の頭、一色商內、
通貨膨脹のお蔭……三二三
綱吉吉宗家齊、スツテンテン、日本橋の眞中、
周圍からの見物人……三二八
滑稽本、違つた世界、現物の江戸ッ子、長著、人口の一割、三代目、
氣の毒な暮し向……三三三

一匁は百八文、田舍者を威す、番茶色のふんどし、稽古所入り、
ざまア見ろ……三三七
王左衞門、女房は道伴、自己批評、狹い天地、結構な所、貨幣の御利益、
大地に小便垂流し……三四二
紅葉番所、馬喰町の馬場、土風、目かつら、春がない、小便溜、
大自慢の水道の水……三四七
山歸りの文句、何時までも問題、
都市の加へる暴虐……三四八
多摩川の水源地、羽村の鮎、沿岸の枯渴、
八百八町の給水狀態……三五二
雜水、上水の分布、井の頭の助水、溜り水、天和の九井、七曲り、五の神村
の井戸、武藏野の鑿井法、
堀兼井の兼の字……三五九
曲尺の曲、山淸水、五左衞門井戸、人間業でない、湯に這入れる仕合、
浴場の尠い譯……三六四

専用の井戸、三富村の芝行水、
名水二十二井……三六六
柳屋の寶物、江戸砂子の十八井、享保に殖えた、
掘拔井戸が珍しい……三七〇
深い喩へ、水道尻、モミヌキ井戸、享保十二年の細見、
五郎右衛門の發明……三七三
竹姫様御用邸、竹の管を穿込、青ヘナ、井戸掘代の年賦、
金澤と内田屋の井戸……三七七
本阿彌の持井、仁王門御防、電車の開通、井戸屋傳九郎、神信心、店先へ掘る、
天明以來の大坂掘……三八五
寛政前後、二百兩かゝる、大名にあつてよきもの、アフリ、水が吹き出す、
掘拔の鎗、元光院の水、お茶の水、御膳水、
抹茶煎茶の流行……三九二
水の吟味、川上不白、八百善の茶漬、水屋さん一杯、一荷百文、鹽がさす、
忘れられた鑿井……三九六
公益事業、雜水井戸、儉約、
必需十二品……三九八
自足自給されぬ、地廻の補給、野州炭熊野炭、油の賣止、魚燈の黑烟、
娯樂の乏しい處……四〇一
人間が拵へ出す、自然が樂しめぬ、寺社で飾る、博奕と私娼、
馬鹿者も名物……四〇五
一枚摺、貨幣の發行元、十文以内の商品、大川通に一萬人、儉約政治の祟、
踊屋臺へ出る娘、永代落橋、
ヨイ〳〵が看板……四一四
癩病はない、類中、お早う、薦被りの齒、
醫者でも無學……四一八
匙が廻らない、藥方の相傳、墨色判斷、天保には四百七十軒、
文久度の一枚刷り……四二〇
始末屋、日濟借、居殘りの鬮取、なまけ者、月代の質入、夜鷹そば、おやん
なんし、馬鹿囃子、子子取、出稼人別、神田の鬼熊、

上方から見た名物……四二七
團十郎の鼻、女中方の代參、家鴨が文庫、
防火設備と耐震家屋……四二九
六七十年目の地震、犬のふん、
女に大騷ぎ……四三一
阿蘭陀學問、湯島の神子、江戸女の變化、尻に痣、浴場覗き、髮切、臀突き、病的な江戸、
驕妻やら姐御やら……四三五
女の尻からげ、生男の風、おちやつぴい、額を拔く、素裸で飛込む、女の立小便、
半四郎のいかづちお鶴……四四一
女助六、女の强請場、異性の辯舌、
寶曆以降の混成語……四四三
關東べい、下司下郎の畠、西直東拗、三河言葉、六方言葉、奴俳諧、上方から指摘、笑話の中、べい〳〵と對照、

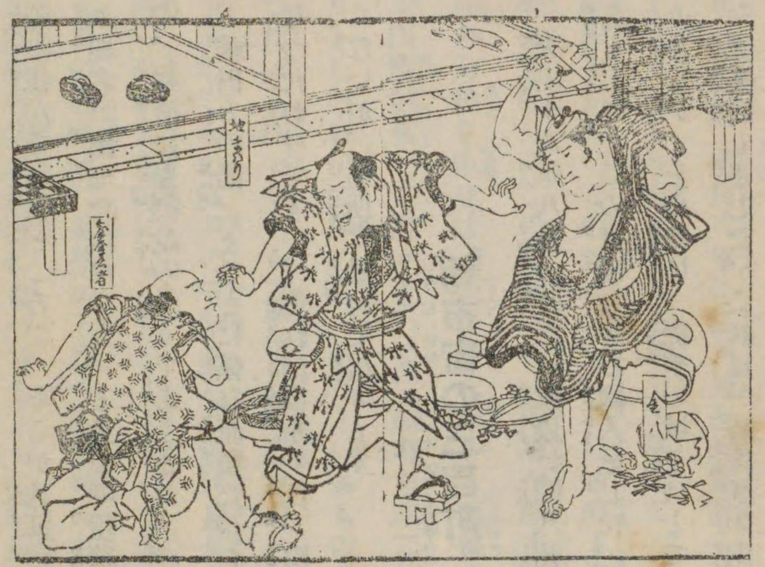
中本の寫した江戸詞……四五四
三馬と鯉丈、ベランメエの見本、
大御所樣時代……四五七
芝居町の寂れ、惜しい過去、安政の縮小、文久の無警察、
貯金は誰がする……四六二
御家人に二色、定府の者、後家婆に三ピン、江戸ッ子の行衞、



櫻田と神田の間

江戸ッ子といふものは私には久しい問題でありまして、誰もむづかしい事だと思つてゐる人も無いやうですが、それでゐてなか〳〵面倒な問題だと思ひます。江戸ッ子といふのは熊さん、八さんの事だといへば一口で片付いてしまふ。江戸で生れない江戸ッ子は無い。だが江戸で生れた者が皆江戸ッ子かといふとさうでもない。これだけでもちよつとわかりにくいやうです。第一にこの

江戸といふ言葉が、地理的に云つてなか〳〵むづかしい。江戸四里四方と云ひ慣らし、江戸八百八町とも云ひ慣らしてゐる。けれども嘉永六年に出來た『千代田問答』を見ますと、『今經緯十里、江戸と稱す』とあります。それならこれが何處から何處までだといふことになると、なか〳〵面倒だ。江戸では京の人でも、大阪の人でも、堺の人でも、一口に『上方者』といつてしまふ。又上方では、江戸廻り、江戸向うの者でも皆『江戸者』だし、關東生れの人なら何でも『江戸者』にしてしまふ。これは御互様の話なのですが、一體江戸といふ土地が何處のところであるかといふと、誰も知つてゐる人が無い。荻生徂徠や賀茂眞淵は、江戸といふのは江の戸で、江戸の門戸といふ意味だといつてゐる。その入江の門戸といふのは何處かといふと、小宮山南梁翁は、それに就て今の宮城の東の方、日比谷の邊は、慶長時分には入江だつたので、江戸といふ地名は、この邊から起つたのであらう。太田道灌が此處に城を築いて江戸城といつたのが何よりの證據である。南の方は櫻田、北の方は神田で、その中間の僅なところが江戸である。和田、日比などといふ地名も、この入江の側の地字であつて、和田には後に倉を建てたから和田倉といつてゐる。『和田』といふ地名は、海濱には澤山あつて、和田岬、岸和田などといふやうなのもある、『日比』は日々網、日々竹などといつて、魚を捕るもの、海苔麁朶のやうなものを云ふのだから、あの邊は漁



櫻田と神田の間

北國笑談の挿畫の一部　金八

師の住んでゐたところで、そこが入江の口だつたのであらう、そこで江戸といふ地名が出來たのだらう、と云つて徂徠、眞淵二先生の說を支持して居られます。如何にも御說の通りでありませう。さうしますと江戸といふものは、櫻田と神田との間、まことに僅な面積だつたので、そこは最初村であり、後に町になつたわけですが、それが後來の江戸町かといふと、さうではない。名前は變らないが、場所は動いて居ります。

新市街の三百町

天正十八年八月一日に、家康が關八州の主となつて、二百五十餘萬石の大々名として、この日はじめて國入をした。この日は後來幕府の祝日にもなつて居りますが、その時に、從來の城下はとても大諸侯の住ひになりませんから、之を修築致しました。これは一時凌ぎの事で、それ位のものでは勿論用が足りませんから、慶長八年に江戸城を改築致しました。その時に日比谷の入江になつて居りました分をずつと埋立てまして、そこへ町數にして三百ほどの新市街が出來ました。この新市街を江戸の古町と申しまして、後々までも別に扱はれて居りました。この慶長八年に出來た新市街が、江戸の下町なのであります。それから後を申せば、天正十八年から天保十三年までの間に、江戸の地形は前後十四度變革して居りまして、開府以來二百七十五年の間には少からぬ變化がありましたが、江戸の町、下町といふものは、慶長八年以來もう動くことは無かつた。それですから『慶長見聞集』などには、南の海を四方三十餘町埋立てた、さうしてその江戸の町割をしたのは慶長八年だ、と書いてもありますし、江戸町の跡が大名町になつたことも書いてある。これは大名小路——櫻田から神田までの地域は、家康が入國された頃の江戸の城下町でありますが、これらは後に江戸の大名屋敷になつてしまつて、民家は新市街の方に移されました。綱吉

將軍時代の事を書きました『御當代記』には、『江戸町中は御城下なれば』と書いてあります。『下町』とは御城下町の略で、慶長八年以來それを江戸の町と稱して居つたのですが、江戸がだん〳〵大きくなつて行く爲にわからなくなつて『府内限り江戸町』と云つて居ります。これは江戸の町中といふ言葉と、江戸の府内といふ言葉を混じて居るので、文政元年八月の指令を見ますと、江戸内外の所は是までといふ引當が無い。何處から何處までが江戸なのであるか、といふ尋に對し、内廓から四里内外を江戸といふ、と答へて居ります。これもやはり江戸の町中と御府内とを混じて居るからわかりにくいので、今日の言葉で申せば、江戸の町中といふのが東京市、御府内といふのが郡部の事なのですから、わかりいゝわけなのですけれども、それを混じるところから、かういふ問答が起り、折角それに答へてもよくわからない。法律上のきまりも無いし、實際目で見た上でも、徂徠が早く『政談』で指摘してゐる通り、江戸の町は境がついてゐないと云つて居りますが、全くさうで、わけがわからない。刑罰として江戸拂ひを行ふ時はどうかといふと、これは町奉行の支配限りといふことになつてゐる。それが法律の規定によりますと、日本橋を中心にして、南へ二里、北へ二里といふことになつて居りますが、これもやはり町中と府内の別が無い。後來の江戸拂ひは、江戸の御府内拂といふことにしか解せられません。『江戸砂子』あたりにも同樣に書いてありますが、明和八年板の『新名數』を見ますと、

江府里數

凡四里四方、其中稱二府内一方二里中央

と書いてある。この『方二里』といふのが江戸の町中で、『四里四方』といふのが府内なのですが、市中と府内を分けずに云ふから、ちよつとわかりが惡い。『武野演路』を見ますと、

城東

日本橋南北神田京橋新橋俗に下町

とある。申すまでもなく、これが『町中』の事で、江戸のわけなのです。文政十二年の山の手出水の事を書いたものを見ても、『内神田竝ニ下町邊』と書いてある。又遡つて延寶五年三月に書いた『江戸惣廻見 分之覺』を見ますと、

數寄屋橋より通町

芝札の辻西の窪麻布新道

赤坂御門の外

同 喰違橋

四谷市谷牛込小石川橋

水道橋

筋違橋淺草橋 兩國橋

これだけが江戸の惣廻だといつて擧げてゐますが、これではとても四里四方はありませんが、これは所謂町中の幅をいつたもので、その内でも江戸と稱するのは下町だけなのです。京の田舍、江戸の田舍といふこともあります。海保青陵が文化二年に書いた東贐に、『此方様の御上屋敷のある處は、江戸では田舍なれども、土地は濕氣薄き處也凡そ臺といふ處は皆高き處を指していふ言ば也、高輪臺白銀臺目白臺三川臺駿河臺本郷臺の類也、巒の嶺也、北は圓山春日町は水の出る處也、東は根津池の端水の出る處也、南は外神田、西は小川町、何れも水出る、四面如此卑き處なれば水をぬくには何れへ流しても流るゝ、又自然と濕氣も留滯せぬ也、唯在番もの懶にて世話をやかぬゆへに、わざ〳〵濕を蓄ふる也、濕氣は除きやすけれども、風俗は大の田舍也、丸の内邊下町邊のことは兎角本郷へ流行すること遲し、人物も本郷の人はぬるし、大やぼ也、うつかりもの多し、不潔也、智淺し、一體江戸は廣き所なるのみならず、郡入り

合ひて居る也。・・・今の御本丸のある處は豐島郡也、御城始めて立つときに豐島郡の千代田村最高し、且郡名村名共に目出度號也と云ふて、今の處に定めらるると承り及べり、豐島は御本丸より下町淺草行德、南は芝築地あたりなるべし、風儀似よりたるもの也品川目黑の方は橘郡なるべし、四谷赤坂牛込本郷は埼玉郡なるべし、風儀似て居る也、豐島は人物、智有ていら〳〵としてするどし、橘はちゞまりて小さき腹中也、埼玉は遲鈍也、むさしぶしやう也、田舍風也、永代向は葛西郡也、是は古へは下總の國也、ゆへに兩國橋あり、本所深川は風儀のらつき遊びずき也、きれいなれども智輕し、是を鶴(青陵の名)は郡違ひといふ也、本郷は丸の内とは郡違也、ゆへに何もかも違ふ也、衣服食物に至るまで一向下町とは違ふて甚惡し』、斯うある。

此方樣御上屋敷といふのは、加州侯の屋敷のこと、今の帝國大學のところ、海保青陵は本郷を田舍だといふのです、此の人ばかりでない、『本郷も兼康までは江戸の内』ともいひました、兼康は齒磨店、今は化粧品を賣つてゐる、天保の頃までは加州邸の前の片側町にゐたさうです、それを江戸の内と云つて江戸とは云はない、青陵よりも餘程高く買つた云ひ振りでも江戸の内としか云はない、本郷のみならず、下町以外は皆江戸の田舍なのです。青陵は郡違ひの論をしてゐますが、違ふといへば下町でも一樣ではありませんが、流石に曲輪の内は話が違ふ、如何にも江戸の江戸たるところがあります。

江戸向と地廻り

それですから外廓を界として、『御府内場末往還圖』などを見ますと、外廓を界に府内、それから向うを場末、といふ風に分けてゐます。これもまことにわかりにくいので、この場末が今日で申せば郡部であり、府内といふ方が市になる。そこをごちや〳〵に書いてあるからわかりにくいのですが、江戸の町

といふのは慶長八年に出來た新市街なので、後々には古町といはれる江戸の町、それは德川氏になつて出來た町、江戸の城下町のことをいふのであります。それ故に法律や古い書付などには混同して書いてあるに拘らず、下町が江戸であるといふ意味をよく現してゐるものがあつて、それは往々人の口によつて傳へられてゐる。例へば延寶八年の『江戸方角安見圖鑑』などに、銀町の土手のところで『南は江戸、北は神田』と書いてある。ずつと後のものでありますけれども、『續江戸みやげ』にも、淺草橋のところで、『是より内を江戸といふ、御外ぐるわの内なればなり』と書いてある。それから誰でも知つてゐる小川顯道の『塵塚談』の中に、寶曆の頃までは白山、牛込邊の人が神田、日本橋邊へ行く時分に下町へ行くと云つた、淺草近邊の者も日本橋の方へ行く時には江戸へ行くと云つた、山の手や淺草邊は近年まで田舍だつたので、それが文化の頃になると、もう江戸へ行くだの、下町へ行くだのといふ人が無くなつた、といふことが書いてある。成程『續下手談義』などを見ますと、山の手邊から下町へ行くのを、江戸へ行くと幾箇所も書いてあります。それから洒落本で見ますと吉原邊の者は、吉原の者の事を『町の者』といふし、下町の者の事を『江戸者』といつてゐる。深川邊でも八丁堀あたりへ行くのに、江戸へ行くといつてゐる。淺草邊の寮から下町へ行くのも、やはり江戸へ行くと云ふ。つまりそんな風にどこからも下町の事を江戸といつて居ります。これが正しい昔からの云傳へを後々まで殘して居つたのでありまして、それがもう文化度には、下町といふものはあるが、下町を指して江戸といふものは無い。それに江戸がだん〳〵大きくなつて、下町のみが繁昌するのでなく、繁昌の範圍がだん〳〵廣くなつたから、昔からの江戸の町と、後にひろがつた江戸の町との區別がつかない。江戸の膨脹の爲にさういふことになり行つたので、大川一つ向うが江戸向うで、江戸の四里四方を江戸廻りとも、地廻りともいつた、さういふ言葉は後々まで殘

つて居りながらも、だん〳〵江戸が擴張されて參りますと共に、さういふ事がわからなくなつてしまひました。本來から申せは、江戸生れといふのは城下で生れた者でなければならないから、江戸の古町、卽ち城下町で生れた者に限るのですが、だん〳〵さういふことがわからなくなつて來た。城下の町は昔の言葉でいつても、土一升金一升、その邊の家は千兩屋敷などといつて、地面の値も高いので、そこには町人でも有力な者が住んでゐる。熊さん、八さんなんていふ人達になると、いづれも九尺店で生れ棟割長屋で暮す人々で、さういふ貸店などといふものは、自然下町には少いわけだし、さういふ手合が下町で生れるといふのも亦少いわけであります。

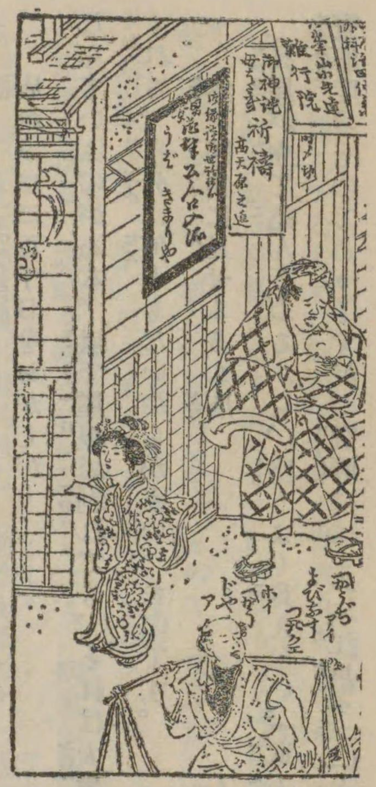
一住ひ三坪二合五勺

江戸の市街地の様子を見ますと、どの町でも地主――家持町人と稱する、又居付地主ともいはれる、自分の所有地に家を建てゝ住つて居る者、それから他町地主といつて、地主が他町にゐるのもある。いづれにも各町の町政は地主が負擔することになつてゐますから、すべての費用は地主が出す。これは下町に限つたことは無い、江戸の町々は皆さうなのです。町役人としては名主がありますが、地主は自分の手に人を抱へて町役を勤めさせる。それを家主といひました。いづれの町々でも、そこに住んでゐる者をどういふ風に分けるかといふと、地主、地借、それからあとは店借です。店借ではあるが表店を借りてゐる者、これは表通で商賣を營んでゐる、獨立した商人ですが、それでも地面家作共に借りてゐるのでありますから、やはり家主の支配を受ける。何右衞門店、誰といふ風に書かれてゐるのはこれであります。それから表店でない、裏店と稱するやつ、これは俗に九尺二間裏長屋といふ。間口九間奥行二間半、それに六世帶、一住ひ三坪二合五勺の棟割長屋といふやつで、名稱の如く往來に面し

た場所ではない、裏へ引込んだところで、大概一棟が六軒位、それが向合せに建つてゐて、一々木戸がついてゐる。この圖は手ッ取早いところで、『浮世床』の挿畫になつたものがある、先づあゝいつたものです。尤も表店は別ですが、裏店の方になりますと、後々のやうに家賃を取つて商賣にする、それで利益を見るといふことはむづかしい。明地にして

浮世床の挿畫にある裏店の圖

置くと無用心だから家を建てる、といつたやうなのが多い。表店も往々にして質流れで持つてゐるやうなのが多く、それを貸付けて利益を見るやうなことは、土地にもよりますが甚だ少い。貸家で算盤が持てるやうになりましたのは、安政以來の話だと聞いてゐます。よく落語に出て來ますが、『大屋といへば親も同然、店子といへば子も同然』といふわけで、一にも二にも大屋の指圖を受ける。地主に頭の上らないのは勿論のことで、その雇人の家主に對しても、なか〳〵頭が上るわけのものではない。假令生粹の江戸生れでも、裏店に住んでゐる人間が幅の利く筈は無い。地主様なんてい



へば、とても相手にも小手にもなれたわけのものではありません。さうしてこの人達の住んでゐる家の家賃といふものは、文政度で四百文、天保度になつて六百文位が先づ當前で、土地によつて差はありますけれども、概してさういふ見當のところに住んでゐる。其の店賃も一度に拂へないから、日掛けにするのもあつた。それですから、どうして見たつて威張れたものではありません。

『武玉川』の句なんぞを見ますと、

店がりは二百十日をおかしがり

なんていふのがある。嵐で屋根が剝れても、それは大屋さんが來て始末をしてくれる。自分は何ともないからかういつたのです。

空を四角に見せるうら店

長屋が立て込んでゐるから、空もよく見えない。『武玉川』は申すまでもなく寶暦度のものでありますが、寶暦にはまだ『江戸ッ子』といふ言葉は無い。が、裏店に住んでゐる者は氣の毒だ、と世渡りの下手なのを冷笑されるより外は無い、哀れ憫然な有樣であります。これが間もなく『己は江戸ッ子だ』といつて威張り出したのは、寧ろ不思議な位のもので、寶暦度の有樣から云へば思ひもよらぬ話である。が、この頃からお長屋の附合といつて、吉凶慶弔の場合は御互に面倒を見る。婚禮や葬式の世話をしたり、病氣の看護をしたりするやうなことは、金のある者の間に見られない情合があつた。貧乏人は察しがいゝし、義理堅いところもある。殊に關東人はそこに力を入れる。極めて飾りなく、考へもなく、直情徑行にやつてのけるところに面白味がある。かういふ風は後に出來たわけぢやない、古いところからあつたのです。一九の書いた『膝栗毛』の發端に書いてあるやうに、彌次郎兵衞が嫁を貰ふと、その女が身持で、お產をするといつて騷いでゐるあたりなどは、なか〳〵人情味の豐なところが見える。あゝいふ事は必ずしも小說だけぢやない、實際ありもしたのです。

百文以下の小賣

けれども彼等の生活は貧乏でありましたから、享保十八年落書、厄拂の文句に擬したものに、

うらだなこんきう百一升

とある。これは江戸にあつた百相場といふもので、米を買ふのに百で何程といふのである、それをいつたので、百文で一升買へたわけなのです。寶暦三年の落首にも、

かごかきと日雇の者は利根なれ百の錢にて三升は買

これも百で三升の米が買へるといふので、百文以下の小賣が無かつた。ですから百文で米を買つても、味噌も鹽も薪も無くて困つたなんていふことが、寶暦度まではあつたのです。寶暦以後、米の擔賣と稱するものが出來て、百文で米も味噌も鹽も買へたのみならず、油や附木まで買へるやうになつて細民が暮しよくなつた、といふことを書いたものもある。いづれにしても細民の生活狀態は景氣のいゝものではなく、氣の毒なものでありましたから、後來のやうに江戸ッ子の鼻ッ張の强いことはどこにも見えない。文政度になつて、大分時代も隔つて居りますが、工賃や何かゞ高くなつて、細民の所得が殖えて來た。大工の一日の手間賃が四匁二分で、飯料が一匁二分といふことになつてゐますから、正月だとか、節句だとかいふ休日、雨風に就て臨時に休業しなければならぬのを差引いて、一箇年の大工の働きを二百九十四日とすると、一貫五百八十七匁六分の收穫があることになる。それが夫婦に子供一人の暮しだと一貫五百十四匁位かゝるわけですから、一年に七十三匁六分といふものが殘ることになる。けれども若し家族が多くなつた日には、とても暮しが立たない、といふやうなことが『文政年間漫錄』に書いてある。そこへ行くと小商をする棒手、菜

賣などになりますと、七百文の錢を借りて、一日の利息二十一文を引いても、あとに五百七十五文殘る。それから一日の生活費用、店賃のやうなものまで勘定しても、二百七八十文あれば暮せる、といつた風で、小さい商をする者でも、この方は大分割合がよろしい。これはだん〳〵後になるほど、細民階級の所得が殖えて參りますので、江戸の經濟狀態に就ては多くの說明を要するわけでありますが、後々ほど勞銀その他が割合を强めて來るといふことは明かな事實であります。

八州を以て天下に抗す

自體この關東八州といふものは、隨分强悍な人間の多いところで、關八州の軍勢を以てすれば、天下の兵を敵にして引受けても戰爭が出來る、といふ云傳へもあり、皆がさういふ心構をしたほどでありまして、隨分强い人間どもでありましたが、秀吉が天正度に西から出て來て、小田原征伐をやりました時分に、關東八州の城といふ城を、片端から虱潰しにして行つて、關東の抵抗力を無くしてしまつたので、これが爲に空氣が一變し、人氣も恐ろしく弱くなつてしまつた。併しながら猶いくらかそれ以前の氣風が殘つてゐないことも無いところへ持つて來て、戰勝の餘威に誇る三河武士が江戸を根據地にして、京都は公家の都、大阪は町人の都、江戸はそれに對して武士の都だといふ位で、日本中で最も景氣のいゝ土地になつた。將軍樣の御膝元といふわけで、江戸に住む人間の氣を引立てた。そこでだん〳〵鼻ッ張が强くなつても來る。加之經濟事情は漸次彼等を豐にして行く。その度合は決して急勾配ではありませんけれども、ともかくだん〳〵收穫が多いやうになつて行きますから、押しならして人氣も出るのであります。彼等は一時の元氣ではあるが、その苦しい暮しにへこたれずに と、にもかくにも暮して行く。享保度に田中丘隅の書きました『民間

省要』の中にも、馬子や舁夫、彼等の附合を見てゐると、朝から晩まで惡口雜言を云ふのを商賣のやうにしてゐるが、腹の中には何もあるわけぢやない、空元氣で暮してゐるのだ、といふことが書いてある。これは後々に『江戸ッ子は皐月の鯉の吹流し口先ばかりはらわたはなし』といふのがありますが、それと同じ心持のやうに思はれる。貧乏ではあつても元氣だけはある。したい三昧が利く。さういふ風で暮して參りましたから、江戸に住む者共には早くから武士を恐れるやうな風が無い。武士といへば時代の權力者でありますけれども、それを憚るやうな氣分が、他の地方の者に比べると大變少い。これにもだん〳〵わけのある事でありますが、その一番先に現れたものが何か無いかと思つて搜して見ますと、貞享四年に出た『色の染衣』、これに隅田川の渡船場のところで、船頭が武家の奉公人をやつゝけるところがある。無論『江戸ッ子』といふ言葉は、こゝには出てゐません。又武家とも云つてない、武家の奉公人なのですが、その氣分は十分察することが出來る。その本文は次に掲げる通り、奴が船の中で威張るのを、船頭がつかまへて陸へ投上げる、さうして氣絶させる、といふのですが、かういふことは事實としてその時分にあつたか、無かつたか、必ずしもあつたとも云へない。それから後來も自慢に云ひます江戸ッ子の痰火、この短い文章の中に船頭の痰火が書いてある。江戸ッ子の痰火を物に書いたのでは、この『色の染衣』が早いものだらうと思ひます。

是程舟こぞりて、はかの行かぬに、男を見そこなつたか、町人斗のせるとは違ふべし、此供内が乘つたと脇差をひねくり、尻はげた小じりをひこ〳〵さすれば、もとよりふとき船頭、横腹のぬける程笑つて、やれ〳〵二合半殿はいはれたり、その仰、みつかひ梶兵衞が、ほてつ腹へはいるべきや、そんな事はかさいの女船頭におもしやれ、かう云ふが口惜くば拔て見や、拔きやると其竹光は折るものじや、飴に代てしやぶるべしと、あざ笑

ひ恥しめられ、いや乍ら拔かねば、ならぬになつて、びやくらい勘忍がならないと、手間をとりてさび付たる脇差を拔て、船頭に切てかゝる、梶兵衞何の雜作もなく、やにはにつかみ、脇差をねぢとり、供内をば岡へ投出す。供内は岡にて目をまはしぬ。

西鶴によつて創められた浮世草子は上方で發生したもので、當時の文學の中心もそこに在つて動かなかつたのでありますが、江戸で出來た浮世草子といふものは、分量に於ても大變少うございますし、作者の數も亦少い。時間から云つても大分後れて居ります。けれどもこの『色の染衣』は江戸の俳人松月堂不角の書いたものでありまして、江戸で出來た浮世草子であります。上方で出來た浮世草子と同じやうに、現代をうつしたものでありますけれども、上方のどの作家の作と比べても別段な味ひがある。巧拙を申せば無論上方の浮世草子の方がよく出來て居りますが、味ひには自ら別なものがある。殊にこの船頭が武家の奉公人をあしらつてゐる按配式は慥に金平模樣で、金平淨瑠璃の趣がある。卽ちこの强みにはどこか芝居じみたところがあります。尤もそれだから江戸の浮世草子は上方のと違ふといふわけではない。大體に於て風味が違つて居るのですが、この『色の染衣』が、特に金平淨瑠璃の模樣になつてゐるのは注意すべき事であります。金平淨瑠璃といふものは剛勇禮讃で、頭から武家を謳歌する。武家と公家とを對照して、公家の權威を木ッ端微塵に打こはすところに見せ場があるのです。それを取入れてこの『色の染衣』は、武家を抑へて庶民の方を勝たせるやうにしてゐる。天和貞享と申せば、金平淨瑠璃は已に盛りを過ぎて、下り坂になつてゐるのでありますが、その趣を振替へて、『色の染衣』の中へ書き出して見ると、それは上方の浮世草子には見られぬ樣子で、甚だ目新しい感じがする。江戸歌舞妓で團十郎の荒事といふものは、金平淨瑠璃の影響を受けたものでありますが、それよりは何分か早く、浮世草子の中にかういふものが

飛出して來る。金平淨瑠璃はこの後一趣向振替へて、別な模樣になつて出て來る。强みは武士を離れて、武士以外に移つて行く。天和貞享と申せば五代將軍の治世になつて居りまして、もう太平の世界である。時間は遠慮もなく武士といふものを過去のものにして參ります。世の姿は移りかはつて、現在は何者の世の中になつて行くのか、といふことを考へさせるやうになつて參ります。それはこの『色の染衣』が金平淨瑠璃の趣向を振替へて參りますばかりではありません。この一轉機といふものは、大分考へていゝ時だと思ひます。

誰が芝居を喜ぶか

そこでこの時分に、武士以外の强みといふことが現實にどうあつたか、といふことを考へて見なければなりません。元祿前後までは、各所に武藝を嗜む者――なか〳〵武勇にすぐれた町人共もあつたので、それは後に江戸ッ子の背景になつた人々の話をするところに讓るとしませうが、武士に比べても劣らない武藝の素養のあるものも多くゐたのです。元祿以後は五代將軍の生類御憐みといふやうな事もあつて、無禮討などといふやうな事も殆ど無くなり、武家がその家來に對する場合のみならず、成敗と稱して手討にするやうなことも、幕府にとつての不首尾になり、出世の妨げになるといふ風で、一體に武家が弱くなつた。この武家の弱くなつたといふことは、暮し向の苦しくなつて來るのと竝行して、時節柄太平の世の中になつて來た爲もあるが、だん〳〵智慧づいて、世馴れて來る關係もあつた。五代、六代とうち續いた將軍の仕癖は、大に戰國傳來の殺伐な氣分を、武家から奪ひもしたのであります。さうすると一方では得意になつて、武家に對する鼻息を庶民が荒くする、といふやうな傾向にもなつて來た。さういふ幸先にこの『色の染衣』の一段を讀んで見ると、江戸に住む庶民の心持に先立つて、この氣分を出してゐたかと思はれる。

自體この頃のものを平民文學といふ。公家を中心にしたり、武士を主人公にしたりしたものでない以上は、如何にも平民文學に相違無い。が、その平民文學は誰に讀まれるか。浮世草子は誰が讀むか。わけて江戸歌舞妓を引立てた金平淨瑠璃の影響、さういふ芝居を誰が嬉しがるか。芝居はたゞ平民のものだと一概に思ひ込んでしまつてゐる。芝居町、遊女町を江戸時代には惡所といつてゐた。そこは武士以外の者の逃れ場だつたのであります。武士は過去のものになつたといふけれども、差當つては法律、制度といふ重石が加はつてゐる。無禮討は無くなつた、町人どもの無禮なこともだん〳〵見逃しにされる、といふ時世にはなつても、庶民が勝手に武士を翻弄して、それが安全であるとは云はれない。けれども惡所では大名の眞似をしたところが、どこからもおどかされるやうな事は無い。芝居にする分には、如何に武士を侮辱するやうな事であつても、遣り方一つで濟んで行く。この惡所で自由に樂しんで行く者は誰か。それは資本のある人間、町人の得意な事である。だから平民文學を好む者や、浮世草子の讀者などといふものは、江戸歌舞妓を見物する群と似通つた、同じ平民の中でも資產のある階級の者共であつた。同じ庶民の中でも、彼等は資力のあるものだけれども、法律、制度の上からいへば、やはり武士には頭が上らない。けれども浮世草子の上や、芝居で眺めるのには、何の差支も無い。殊に自分より猶低く見る目下の者共——自分に頭の上らぬ位の人間どもが、自分が仰ぎ見なければならぬ武士を嘲弄、侮蔑するやうな事、さういふものを芝居にするのを見て、非常に愉快に感ずる。これなら何の危な氣もなく愉快になれる。後來江戸ッ子といはれる平民中でも最低級に居る人々といふものは、いつも見物人を喜ばせるものになつてゐる。吉原へ行つて武士と買競べをする、さうして之に買ひ勝つ。それは金で勝つのであつて、威權赫々たる武士と雖も、こればかりは何ともならない。金で面を張るのです。それだから平民文學のみなら

ず、江戸歌舞妓といふやうなものでも、後來江戸ッ子といはれるやうな人達のものではない。熊さんや八さんは浮世草子を讀むことは無い。檜舞臺を見物することも殆ど無い。却つてその中へ取入れられて、資産ある平民どもを嬉しがらせる一つの材料たるに過ぎなかつたのであります。

惡對趣味に耽る

芝居の見物人は猿若町にならない前からきまつてゐたのですが、大概市民の中でも地主級の人達、それに地借級位のところで、町人と一口に云ふうちにも何分か錢のある者の方だつたのです。その外檜舞臺を見物するのは御供でするのであつて、地主などに緣もゆかりも無い者になりますと、なか〳〵立見も出來ない。飛ばすので芝居の名物になつてゐた大向、さういふ錢の安い見物でも、なか〳〵年に一遍出來るかどうか。手錢の見物なんぞは十年にも十五年にも見ない者がいくらもありました。それですから最高級の市民のみが見るといつてもいゝ、この芝居見物の階級、さういふものを一つ市民から別けてもいゝほどである。その芝居見物級の人達でも、一年に三四回しかない興行を、替り目毎に見るといふことはない。芝居の替り目毎に見るといふ人は贅澤者の方で、一般の例にはならない。金持の我儘娘が芝居を替り目〳〵に見られるやうな家へ嫁入したいといふのを、法外な條件と考へた位であります。

芝居見物の階級といつて、市民のうちで、有福な者の方でさへ、さういふ始末でありますから、一般市民と芝居見物とはよほど懸隔りがあつた。それよりもう少し遡つて見ますと、元祿度までの芝居といふものは、俳優術で見せるのでもありませんし、無論脚本で見せるなんていふことでもありません。何よりも男色關係で牽きつける。さうしてこれは上方役者の專らにするところでありました。けれどもさうやつて牽きつけますにしても、武士階級はそれらの

者共を屋敷へ呼ぶといふ方が主で、行つて見るといふ方は少い、この男色といふ野蠻な風習は、享保になつて衰へました。さういふ方で見物を寄せるといふことも、從つて衰へたわけであります。これに先立つて江戸の女達の見物といふものがだん〳〵殖えて參ります。芝居に女の集ることは、どうも上方より江戸の方が早かつたやうに思はれる。遊女町の方は延寶を境界にして武士階級から離れまして、元祿には全く町人のものになつて居りましたが、芝居の方は最初から武士ばかりが御客ではなかつたやうです。わけて正德の江嶋事件などがありましてからは、武家から見物する男女が目立つて減りました。享保になりましては法令の關係がありまして、武士が表向に芝居を見るといふことが愈〻減つて參りました。芝居の方が遊女町よりも町人の世界だつたわけであります。

市川團十郎といふものが江戸の名物になつてゐる。この團十郎は歌舞妓三座——もとは四座あつたのですが、山村座が無くなつて、中村座、市村座、森田座とこの三つが最後までであつた——の座主ではない、はじめからしまひまで抱へ役者でありました。が、抱へられる身分であるに拘らず、芝居道で大さう重んぜられてゐる。たゞ芝居道で貴ばれるばかりでなく、江戸の表徵のやうにもなつた。といふのは、彼の家の藝とする荒事、彼の得意であるツラネ——稀代に又團十郎の家では辯舌の達者な者が多く出て居ります。このツラネといふのは、先づ惡對の塊りみたいなものです。痰火を切るといふのは漢法醫者の言葉で、咽喉へ痰が詰つてゼイ〳〵いふ、そこへ熱を持つから痰火といふのですが、咽喉へからまる痰を切つて出せば氣持がよくなる。そこで『痰火を切る』といふ言葉が出來た。『溜飲を下げる』抔といふのも同じ事で、この惡對の塊りを出す。云はんと欲して云ふことの出來ないことを云ふ。芝居を見物してそれを喜ぶ。又實際見ないでも、見て喜ぶ人達の樣子が自分達を浮立たせるから、見ない手合までが騷ぐ。芝居はこの惡對といふものによつて、

江戸ッ子に景氣をつけ、人氣取をする。そこに惡對趣味といふものが出來て、ッラネといふものが喝采される。それを例の芝居見物の階級の人が喜ぶ。さうすると下級の江戸ッ子と自稱する手合が、自分に代つて云つてくれたやうに思つて、芝居から附けられた景氣で嬉しがるのであります。

城下町人の擡頭

一體町人――城下町人といふものが頭を擡げて參りましたのは、戰國時代の半を過ぎて、城取の法が變つて城廓に市街を包容するやうになつた。これは無論物資の集積を目がけての城取り法なので、そこには町人が澤山集められる。さうした規模の最も大きなのは、太閤樣の大坂築城などがいゝ例でありませう。江戸の幕府になりまして、貨幣制度を立てられて、三代將軍の頃までには貨幣の數量も殖え、制度も整つて來ましたから、貨幣も十分にその性能を發揮するやうになりました。五代將軍の時には外國貿易の關係から、海外へ金銀の流出するのを防ぐ意味もあつて、元祿の惡貨なるものが出た。そこで通貨膨脹といふことになつて參りまして、資力ある者が物持と金持との二つに分れるやうになつた。物持といふのは土地その他、物で持つてゐる方、金持といふのは貨幣で持つてゐる方なので、その以前からこの二通りの資力は認められて居つたのですが、通貨が膨脹してからは、物が高く金が安くなつて、物を持つてゐればひとりでに資力が殖えて來るわけになつて參りました。けれども物はいくら高くなつても、物持はぢつと握つてゐるのですから、商人が儲けて賣つて又買つてといふ風にする、資力の運用のいゝのには敵ひません。そこでこの頃から物持よりも金持の方がえらいことになつて參りまして、さなくとも多くなつて來た貨幣だけに、今までより金銀の片寄りといふものが目立つて來た。卽ち農村に割據してゐる物持と、市街地に住んでゐる商人の金持といふものとは、すつ

かり形勢が振替つてしまつて、手堅いといふ事よりも、どん〳〵身上が殖えて行く町人全盛の世の中になつて參ります。然るに金持では勿論なく、物をさへ持つてゐない武士は、たゞ制度、法律の支持する爲に權力だけ持つて居りますので、こゝに虚威と實力との對抗になつて來る。武士は太平の爲に戰爭が無くなつて、本業を失つたことになつてゐる。丁度火事の無い時の消防夫みたいな姿である上に、資力といふものが無い。だから彼等は過去の者とされるのみならず、どうしても侮られるやうになり勝である。元文に貨幣が改鑄されまして、その勾配は益々強くなりました。貨幣の數が殖えて來れば來るほど、武士は愈〻虚威ばかりになつて、實力は愈々身が入つて來る。さういふ有樣ですから、町人どもは實力を擁して虚威の前に低頭してゐるといふことが面白くない。併しそれは法律、制度が支持してゐるのですから、正面からは何ともすることが出來ない。たゞ腹の中で面白くないと思ふだけである。内訌してゐて、暴露することは許されない。資力のある者はどうしても自分の身を大事にするけれども、細民の後先無しの者共は、簡單に後先構はずに惡對をついて一時の快を取る。それが『鼻ッ張』とか、『娑婆ッ氣』とか云はれて、何か反撥がましく見える。彼等の言葉にすれば、癪に障る、胸糞が惡い。彼等は働きさへすれば食へる。夜が明けさへすれば賃銀が取れる。棒手振とか、日傭取とかいふ手合でありますと、江戸中の白壁は皆旦那だといふやうなわけで、拘束されるところが無い。この氣持の出て來るものが江戸ッ子の『べランメエ』で、それを芝居が代つて代辯するのであります。

男立狂言の流行

團十郎を張本として芝居が煽り立てる市井の人氣といふものは、そこらのところに根ッ子がある。若衆形が惡役をきめつけるなどといふやうな、手ぬるい

ものではない。もつと壯快に惡對の塊りを抛り出して見せる。芝居を見物する階級はそれを喜ぶし、芝居を見ない、といふよりは寧ろ見られない方の連中も、心持よく景氣立つ。芝居の仕向を見ますと、古いところから何分かさういふ傾向があるやうですが、際立つて見えるのは寶曆以來で、當時は男立狂言が盛に行はれた。寶曆四年の中村座春狂言、四代目團十郎の荒五郎茂兵衞本名景清と、歌右衞門の鐵壁武兵衞實は三保谷四郎の男立出入で、『歌舞伎年代記』にも『爰で互に惡たいのせりふ』と書いてある位である。この頃から男立狂言が盛になつたのであります。

それから男立の出端に使つたセリフ、それが男立に限らず、いろ〳〵なものに使はれるやうになつた。一體長いセリフを聞く芝居は、二代目團十郎以來のものでありますが、明和、安永度になつては惡對趣味が愈々增長して、セリフも隨分長くなつて參りました。例の助六のセリフなども、『わりやアおれを馬鹿にするな、惡くそばへると、大どぶへ浚ひ込むぞ、鼻の穴へ屋形船を蹴込むぞよ、口を引ッ裂くぞ、こりや又何のこつた』といつたやうなセリフは、前からあつたものではない。寛政度になつて、かういつた調子合になつて來たのであります。曾我の對面などで、五郎、十郎の兄弟にさへ、痰火を切らせるやうになつてゐる。それですから長兵衞の元祖といはれた花川戸の幸四郎のセリフを見ると、『見かけはケチな野郎だが、水道の水を飲んだ御蔭にやア氣が強い、弱い者なら腰を押し、強いやつなら向う面、韋駄天が革羽織で鬼鹿毛に乘つて來やうが、ビクともするのぢやござんせぬ、及ばずながら達衆の端くれ、阿波坐烏は浪花潟、藪鶯は京育ち、吉原雀を羽がいにつけて、江戸で男と立てられる、男の中の男一疋』といふやうな事を云つて居ります。

芝居がどん〳〵煽動して行く、その煽りを食つて、黃表紙や洒落本にも書いてあるが、その書き立て方はまだ〳〵少いが、それが中本になりますと、文句

も隨分長くなつて、『膝栗毛』の北八が嶋田の宿で百姓爺と喧嘩をする時の言葉、三馬が『酩酊氣質』の中に書いた言葉などを見ますと、なか〳〵凄じいものになつて居ります。その言葉の馬鹿々々しいことといつたら、ひどいものですけれども、それに氣がついてゐない。たゞそれに興味があるとして、聞いてもゐれば讀んでもゐる。その云ひ方といひ、言葉の意味といひ、又その組立方といひ、調子まで考へてある。だから三馬の如きは自分の書いたものに、こゝのところはどういふ調子で讀んで貰ひたいといふ、讀方の註文までしてゐます。が、要するに惡對の塊りで、かたまつてしまつては意味も何も無い。只だ大に威張つてはゐるやうだが、何の當り障りも無いやうに出來てゐる。その邊はなか〳〵巧なものだ。けれどもそれは狂言作者とか、戯作者とかいふ人達だからさういふものが出來る。又咽喉や舌も相當修練してある役者だからそれが云へる。役者が口跡に苦心するのは並大抵の事でない。今日の役者には隨分變な聲を出すのが居りますが、昔は役者の三拍子といつて、一調子、二フリ、三男といつた位のもので、長い〳〵惡對の塊りでも一氣に云つてしまふ。息もつかずにいゝ調子でしやべる。そんな事も江戸ッ子には出來る筈が無いし、又彼等の知識では決してあゝ見事には纏まらない。元來彼等には辯舌などはないので、殊に調子の修練などがあるのでないから、とても役者の眞似は出來るものではなし、中本に書いてあるやうな事が云へるものでもない。本の上乃至舞臺の上であればこそ、あゝいふ風に行くのである。さうして又實際としたら、誰がそんな文句を聞いてゐるでせう。これは聞いてゐる氣遣も無い。聞手も無ければ云手も無いにきまつてゐる。けれども芝居小屋の中では、この痛快な惡對の塊りによつて、江戸ッ子なるものゝ風采が空想される。何だか景氣よく受取れる。見物人の頭の中、眼の先に江戸ッ子の風采が面影に立つやうになる。醉つたやうになつて、これを興ずるのであります。

凄じい芝居の煽り

それが隨分久しい間の事で、この興味がだん〳〵增長して參りますと、江戸ッ子といふものと、痰火を切る事とは、どうしても離して考へられないやうになる。ありもしない事でも、それが現實のやうに思はれて來る。けれども實際の江戸ッ子はどうだといへば、『何でえ、ベランメエ』といつた調子の極短いもので、長い文句は無い。殊に言葉の手ッ取早いのを誇る風がありましたから、『何が何にして何だから』で用が足りる。長い文句などは實際云つてゐない。江戸言葉といふことに就ては、別に云はなければ分りませんが、とにかく芝居から背負ひ込んで來た江戸ッ子の痰火といふものは芝居仕込のものであります。それがだん〳〵と沁み込んで來ますから、江戸ッ子が痰火を切るといふのみならず、江戸ッ子の畠でない者までが釣込まれてそんな風になる。その最も面白

い例を一つこゝに擧げて置きませう。

夫東武に生れ、上水の清流に生立し身は、將軍家の御威光を兩肩に荷ふが故に、若齡の昔より數十度、他國に遊ぶ折柄は、我住國を譏り、土地を壞なじるの族に出會するといへども、鸚鵡返しに答へて、これまで一度にても引をとらず、東武の氣性みなかくの如し、予今歳老て牙齒ぬけ落、顏容昔に異たりといへども、嗚呼つがもねへ、江戸子なるものを。

これは『十方庵遊歷雜記』の文章です。この『遊歷雜記』といふのは、小石川水道町の廓然寺といふ寺の隱居さんで、敎順といふ人が、文化十一年、六十一歳の時に書いたものです。江戸ッ子には爺はありません。人間としては無理な話で、市民の最下級の者が江戸ッ子なのですが、いくら最下級の市民だといつたところで、年を取れば爺にならなければならない。けれども江戸ッ子に年寄は無い。水ッ洟、白髮頭、齒ッ缺では、『エ、コウ、ベンラメエ』とやつても

一向呀えない。さうした言葉が似合ふ年配だけに限るやうに思はれてゐる。これも芝居から背負ひ込んで來た幻覺の一つであるかも知れない。けれどもこの隱居坊主さへ、『俺ア江戸ッ子だ』と云つて威張るところは、何程芝居かぶれがしたものか。併し當人は別に芝居かぶれだとは思つてゐない。そこが面白い。岡山鳥の『楊弓一面大當利』に、鼻高幸四郎の事を『年こそよつたれ、江戸ッ子の元祖』と云つて居ります。四十を越えて五十になれば、もう老込といふ。老人は江戸ッ子の引け目であることはこれらでもわかりますが、心持はやつぱり江戸ッ子で、身柄も隱居坊さんのやうな人まで、そこに釣込まれてゐるのであります。

こゝで實に思出し笑をしたくなつたのは、明治の初年に民權運動が起つた。政治の政の字も知らない、權利といへば食ふ物か知らんと思つてゐた位の人民に對して、大變騒ぎ立てゝ煽立てた。さうしてこれを道具にして、新しい運命を作ることを考へた。それからだん〳〵教育が普及して、幾分づゝかさういふ事がわかつて來るやうになり、遂に今日のやうな世界が出來た。隨分そらぞらしいやうなものであつたのを、しかつめらしい顏をして、先覺者らしい樣子をする。それと芝居が江戸ッ子を煽つて芝居の見物階級を煽つたのと似て居りはしないか。前からさういふ傾はあつたのですが、殊に寶曆の男立芝居この方は、權力に對する資力、財產力の鬱憤、卽ち町人が武士に對する不快、空威張をする武士に對して何か報復でもして見たい心持、そこで任俠といふものを翹望する。そこへ芝居の者が附込んだやうに見える。といへば或は合點しない人があるかも知れませんけれども、大さう無事に見えた寶曆度は、實は非常に混沌として居つて、無事なのはたゞ外面だけの話に過ぎない。京都で竹內式部が御公家さん達に入說した。これが純粹な勤王運動の根本であつて、明和には江戸で山縣大貳が繰返してゐる。かういふ江戸時代未曾有の事件が起つて居りま

す。殊に明和になりましては、農村の疲弊から百姓騒動が非常に多く、特に農民法度を出さなければならぬ程でありました。さういふ機會でありましたから、寶暦の男立芝居は――芝居者にそれほどの心持はありますまい、江戸の低級の市民を煽つて高級の市民を喜ばせるだけの意圖に相違無いけれども、それ以上に眺められも致します。

下方あつての所作事

さうして明和になりますと、所作事が大變に喜ばれた。この所作事が流行る時は、何時でも舞臺の方はヂミになつて來る。これは後々もさうでありまして、地藝に耽る時は何時も所作事が流行る。ヂミなところへ派手やかな、夢のやうな美しさを見せて行くといふのは、舞臺の上の效果もありますし、人の氣持を取替へて行く興行政策としても、さうあるべき筈でありますが、明和度に殊に注意しなければならないのは下方の起つて來たことであります。この下方によつて、所作事が從前のものより立派になり、引立つて來て、凄じい勢を見せた。さうして從來は舞の方であつたものが、この時踊の方にかつきりと別れて來た。二三の除外例はありますが、概して申せば、舞といふものは拍子を主としたもの、踊といふものは歌詞の說明を主としたものであります。この時の歌詞はどうかといふと、だん〳〵ヂミになつてゐる芝居の中に割込んでそれを引立て、美しくするやうになつてゐる。そこで用ゐられるものは遊女町の事になる。從來も同じ惡所といふので、人を樂しませる、遊ばせるところだから、遊女町と芝居町とは共通した意味がありましたが、明和の所作事の歌詞に至つて、その材料の重なるものを遊女町に採りましたから、こゝで一層緊密な關係を生じた。又この時から戀と色とが別れて來る。『武玉川』を見ますと面白い句があります。

元祿の頃迄戀は命づく

後來になりましては、遊女以外の男女の道も賣物買物のやうになつた、といつて歎息するやうにもなりました。自分の懇意な女を指して、あれとは色だ、とさへ云ふやうになつた。まことにその間柄といふものは心易いものになりまして、情死するよりは駈落をするやうになつて來た。

それから江戸長唄といふものは、もと舞臺で使はれるやうに出來てゐたものでありますから、それが下方によつて一層舞臺效果を大にしたのでありまして、これも慥に一の進歩に相違無いが、その歌詞に遊女町の事を主として用ゐた爲に、芝居がだん〳〵遊女町を包容するやうになつて來た。それと共に戀でなくて色になり、命がけでなしに戯れであるやうに導いて行く急勾配を與へたことは、注意しなければなりません。長唄がさういふ運勢を得たと共に、豐後節は元文以來江戸歌舞妓と結びついて居りまして、軈て淨瑠璃といへば豐後三派の事を云ふやうになり、上方で發生した系統であるのに、常盤津、富本、清元といふものは江戸のものであるやうに考へられる。所作事の流行は、この豐後三派を誘つて愈々盛になつて參ります。

一體この豐後節が參りますまでは、商賣人が稽古をするので、素人がそこへ稽古をしに行くことは無かつたのでありますが、豐後節以來は町家に稽古屋といふものが出來て、誰も彼も稽古するやうな風になりました。又これが町藝者といふものを一層盛にした。岡場所で名高い深川、彼處の藝者共は主として豐後節の畠から出たらしい。さういふ風で唄とか三味線とか踊とかいふものがずん〳〵泌み込んで行く。この勢は小學校で無意識にオルガンを鳴らして遊ばせたのがもとになつて、今日の洋樂流行の勢をなしたと同じ事であります。唄とか三味線とか踊とかいふものが、芝居町、遊女町を根據として其處から外にひろがつて行く、一方に芝居の方は寛政度から眞世話狂言といつて、益々ヂミな方へ趨つて行つた。地藝を專らにするやうになつて、頻に寫實するのを喜

ぶ風があつた。だん〳〵それが追目になつて行きますから、化政度には愈々所作事が盛になつて、町々の踊の師匠が立派に成立つて行くやうになりました。さういふ風ですから、藝者は勿論、踊子も元祿前後で問題になつたのとは違つて、愈〳〵派手々々しいものになつて參りました。『世事見聞錄』は文化十三年に書いたものでありますが、その中に、藝者踊子は米三俵五俵の代を一日の間一座に貰つて行く、だが侍は一俵の米も命がけでなければ貰へない、といふことが書いてある。それから又藝者、踊子の一日の所得と、武術者、儒者などの一箇年と同じ釣合である、といふことも書いてある。一體江戸といふところは非常に娯樂の乏しいところでありますす。物見遊山といつた處で場所が尠かつた、それは江戸年中行事をひろげて見ればわかることですが、武士は自分の身柄の爲に妨げられて、容易に外出は出來ない。芝居町や遊女町に出掛けるのは億劫でもあり、又法律があつて、それを束縛もして居ります。町人としても三芝居の興行が年に三遍か四遍といふ有樣で、神社佛閣の法要とか、祭禮とかいふやうなもの、月見、花見といふやうなもの、おまけに交通が不便であつて、皆テクで行かなければならないのだから、今日と比べてはなか〳〵話が出來ないのみならず、樂しむものゝ數が少い。そこで芝居で景氣を煽つたものですから、藝者の唄にせよ、踊子の踊にせよ、芝居を持込んで芝居の煽りで行はれる。樂しみの少いところだけに、そこへ人氣が集る、といつたやうなわけである。殊に寛政頃になりますと、方々に料理屋もありましたし、舟宿、水茶屋といふやうなものもあり、殊に圍者といふものが最も流行つた時代であります。有福な町人、物持の百姓は勿論の事、坊主からはじめて町家の手代小者まで女を抱へ込んでゐる。けれども士の方はきまりきつた取高でありますから、さう思ひきつたことは出來ない。さういふ女達は皆遊藝の嗜みがあります。どんな貧乏な者の子供でも、唄とか、三味線とか、踊とか、例の下方、といへば鼓太鼓の

やうなものですが、さういふものを稽古さして置いて、藝者にし、踊子にし、圍者にする。さうでなくても旦那取をさせる。何でも金のある者を取入れる。さういふ事をさせるには、やはり唄とか、三味線とか、踊とかいふものを媒介させる方が都合がいゝし、存外樂な錢が取れて、親達の懷も工合がいゝ。誰彼なしにその稽古をする。その稽古をするものはといふと、皆芝居で拵へたものを使つてゐるので、踊などは皆役者が家元になつてゐる。芝居といひ、役者といひ、さういふものゝ方に皆根ッ子を持つやうになつてゐるから、芝居の勢力が殖えて行くわけである。又寛政以來の事として、樂しむ事のごく少い江戸の町々に寄席が出來て、いろ〳〵な演藝、聲色とか、落語とか、さういつたやうなものをする。已に芝居見物級の市民を引附けて、人氣を集めてゐますから、それらが皆芝居がゝりのものでやる。さういふ風で面白いものゝ一番親方が芝居であるやうになり、芝居の方では又地藝にしても、所作事にしても、世間について廻るやうな風がある。芝居でなければ面白い事は無いやうになり、芝居の事がひとりでに世の中へ出ても來る。又若い者共が寄つて茶番をする。この茶番も寶暦以來芝居の方から出たことで、役者の身振や芝居の眞似をする。さういふ事をやつて樂しみ、見て樂しむ。若い娘の眞面目な方でも、嫁入をする時の條件に、この時代の高等教育であつた御殿奉公をするにも、唄とか、三味線とか、踊とかいふものは必ず數へられる條件でありまして、踊が所望とか、唄が所望とかいふことで、御奉公の出來ることも澤山あつた。それだから息子や娘が御祭の屋臺に出るといふやうなことも出て來る。樂しみの尠い時代でありまして、比較的自由な事の出來る町人の樣子を見て、自分の身分の窮屈な武士はそれが羨ましい。さうして樂しむことが面白いから、中通り以下の武士の家庭では、自分でいろ〳〵な稽古をする。もう少し高級なところで樂しむための人を抱へ入れたり、雇ひ入れたりするやうになるのであります。

是に於て江戸の上下は悉く唄や三味線の稽古をする。唄や三味線の稽古が盛になつて、一般にひろがつて行く時は、芝居を根としてゐる遊藝であるだけに、芝居といふものが勢力を持つやうになりまして、世の中の有様を芝居にも取れば、芝居のやうな風に世の中もあるやうになる。それですから『世事見聞錄』の著者は、今の世の中は芝居が世の中の事を眞似るんぢやない、芝居がもとになつて世の中の方が眞似るんだ、といふやうな事を申して居ります。

生世話物の半天着

さういふ風に芝居が推し進んで參りますうちに、四代目小團次が出ました。この小團次は嘉永、安政を盛に過ぎた役者で、生世話物を得意にした。生世話といつてもごく突込んだもので、前のは『眞』の字を書いたが、今度のは『生』の字になつてゐる。生寫しに書いた世話事で、現代劇の中でも生粹の現代劇、いづれも新作物で、半纏著の三尺帶をしめた人間が主人公になつてゐる。人氣取にやつた江戸ッ子への附景氣が、たうとうこゝまで引張つて來た。市井の樣子を丸寫しにした芝居、それは半纏著に三尺帶をしめた人間を主人公とするものである。この生世話狂言といふものは、五世幸四郎、三世菊五郎といふ系統を引いたものですが、それよりも小團次のは遙に突込んでゐる。申すまでもなく幸四郎は晩年まで盛だつた人で、寛政、天保の間がその全盛時代だつた。それに續いて三世菊五郎は嘉永まで居りましたが、文化、文政が、盛りの役者である。それに續いた小團次は、今で申したら深刻なやり方で行つた。その時分の江戸の時勢といふものは隨分憂ふべきものでもありまして、江戸三百年の間にはじめての法令が發布された。即ち慶應二年の二月、守田座で鑄掛松の芝居をしてゐる最中に、どうも近年の世話狂言といふものは人情を穿ち過ぎたもので、風俗にも拘る筋目のものだから、以來はもつと芝居らしく見える芝居をして、

あまり時勢そのまゝの事をしてはいけない、とまで達するに至つたのであります。

かういふ次第でありますから、芝居といふものと江戸風俗といふものとが、如何にも密接な姿に在つたのはいふまでもなく、又何の不思議も無いわけなのでありますが、小團次に至つては江戸ッ子の附景氣を煽つた以上に出てゐる。けれどもそれはそれとして、江戸の芝居といふものが、早くから興行政策に見當をつけてゐて、江戸ッ子の人氣をつけて江戸市民の關心を摑んだといふ事、その先頭に市川團十郎が立つたといふ事は、大に感服されなければならぬ先見だと思ひます。と共に其の覘ひが的中以上の效果を收めて、江戸ッ子は八百八町の代表者でゞもあるかのやうになつた、畢竟するに見物人によつて江戸ッ子は浮き立つた、云ふまでもなく町人の勢力の擴大によるので、町人の勢力は權力ある武士を亡し、何の效能もない江戸ッ子を名物にする作用を呈した、何のことはない、江戸ッ子稱賛の聲は卽ち町人萬歳の叫びと聞いてよろしからう。

武士當りが惡い

江戸ッ子の鼻ッ張、向意氣が強い。が、何も理窟があるわけでも何でもない。その鼻ッ張や向意氣でむやみに喧嘩をする。それがずつと後の世まで持越して、東京人になつてからでも、ものゝ二三町も往來を歩けば、一つや二つの喧嘩の無いことはない。喧嘩と醉倒れの多いことは慥に江戸の名物でありました。喧嘩といつたところで、突當つたとか、足を踏んだとかいふ事からのが多くつて、それも大した事をするのでなく、大抵毆り合位のものである。喧嘩に馬鹿げた元氣を見せるやうなものゝ、大怪我をさせるとか、打殺すとかいふやうな事は殆ど無い。勿論支度をしてかゝるわけでもないのだから、大きな事のあらう筈はありません。フランス人は喧嘩をする時に『クーラージュ〳〵』と

云つて喧嘩をしますが、江戸ッ子の喧嘩には『クーラージュ』も何も無い。が何かそこのところに似寄つた所があるやうな心持もする。其の場で引けてはならぬ、卑怯らしく、ないやうに心掛ける、喧嘩をしないでは勇氣が足らぬやう思ひもすれば、思はれもする、行き掛つて喧嘩をしないでは外聞が惡い。見榮にも喧嘩をしなければならないのです。

尤も大きな喧嘩といふものも鳶の者の方にはあつた。誰でも知つてゐるのは芝神明の喧嘩で、相撲取を相手にして大きな喧嘩をしたのですが、それだけではありません。幾つも有りました、又た火事場で鳶の者同士が喧嘩をする、それが翌日、翌々日に持越して大きな喧嘩があつたといふことは再三再四あります。鳶の者には組々がありまして、自然團體を成してゐるので、その團體と團體とが喧嘩をするのだから、大きいのもあるし、喧嘩の支度も出來ることになる。さういふものゝない、全く個人の喧嘩には、さう大して大きなのは無い。

中ッ腹で直ぐ喧嘩腰になつてかゝる風がありますので、江戸ッ子の鼻ッ張は凄じいものゝやうに思はれても居りますけれども、實をいふと大したものではない。文久の頃になりますと例の浪人達――あの人達は御互に『馬鹿』と一言いふ時には、刀の欄へ手をかけてゐなければならないほど氣が立つてゐました。さういふ浪人達が江戸をあばれて歩く時分には、江戸ッ子はもう何の景氣も無い。鼻ッ張といふことを字に書けば反撥で、それは世にも凄じいことのやうに思はれるけれども、それだつてやはり同じ事だ。江戸ッ子なんていふものは、平生家主に頭が上らない。況して地主となればもう形なしである。その外にまだ出入場なんていふ關係になると、さつぱり意氣地は無い。全く掛け障りの無い人間を相手でなければ、痰火を切ることも出來ないが、威張ることも出來ない。

江戸ッ子の世界は市街地です。武士とは掛け障りがない、大屋さんも地主様

も町人です。出入場の旦那も武士ではない、彼等は御詫を並べるのに都合のいゝ相手、立派な見榮のある相手としてリヤンコに對する。武士は恰も彼等のためには安全地帶でもあつた、『士がこはくつては燒豆腐は食へない』と陰口をきき、『リヤンコ』といつて馬鹿にする。面と向へば御武家樣、旦那樣だけれども肚の中では馬鹿にしてゐる。時によつては隨分口へ出して無禮なことを云ひ、シグサの上でも失禮なことをやらかす。それは無禮討であるとか、慮外者の處分とかいふやうなことで、武士が斬ることをしない。元祿以來、如何なる理由があつても町人などを斬りでもすれば、それが一生の疵になつて出世の邪魔になる。又諸侯の家來で江戸へ出てゐる者などは、幕府へ憚つて、江戸で何か事の起らないことを專一にしてゐましたから、さういふことをなるべく避けるやうにしてゐます。士といふものは素刃拔をしない者、斬らない者となつてゐましたから、安心して馬鹿なことも出來ました。何故士を馬鹿にするか、これは士のすることがギゴチない、野暮くたい、といふやうなことや、勤番士なんぞの國から出て來たものは、隨分なりふりもをかしい、その邊から馬鹿にするのかといふと、それだけではない。大體士になると、渡舟の渡し錢も拂はなければ、橋錢も拂はないといふ位で、錢を落さない。一向錢を遣はない、錢に汚い、と斯う思ふ。町人になりますと、湯に入らうが、床場へ行かうが、何につけ彼につけ心附だの祝儀だのといふやうに散財をする。これは旦那賃、旦那樣といはれる爲に出す錢です。物を貰ふのはたゞより高いといふことは、この旦那賃から來てゐる言葉なのですが、士はそんなことはしない。何だかあたじけない。それが爲に江戸ッ子どもが馬鹿にする。そこで田舍の士などは江戸へ出たならば市井のつまらぬ者などをなるべく相手にしないやうに、立腹するやうなことがあつても、決して爭を生じてはならぬ。といふことは、古くから諸藩の掟にもなつて居ります。これはいろ〳〵書いたものもありますが、

天明八年に書いた『夢語』に、

今の風俗、江戸にては武士たるものをも輕きものゝ畏れずして侮る風に成行きし、

とある。又寛政度に書いたと思はれる『近世諸家美談』の中にも、

江戸にて虱と士をおそれては住居ならぬといふ事有、當世は遠國武士も此古語をよく合點して至極やわらかになりたり、

などと書いてあります。天明、寛政の頃になつては、江戸市民の武士當りが餘計惡くなつて來たのでせう。それから以後になれば更に一層惡くなつてゐる。けれども武士といふ武士が皆この心得を以て相手になつてゐますから、何の事件も起つて居りません。それが又江戸ッ子なるものをいゝ氣にさせるわけでもあります。

鼻ッ張りの限度

と申すうちに、江戸ッ子の鼻ッ張もなか〳〵侮り難いものゝやうに云ふ人もある。さういふ人が第一の例に擧げるものは『元正間記』の記載です。これは元祿十六年二月、赤穗義士が切腹をした時に、日本橋に掛けてあります御制札、その第一番に、

一忠孝をはげまし夫婦兄弟諸親類にむつまじく、召仕之者に至る迄憐愍を加ふべし、若不忠不孝の者あらば可爲重罪事、

といふ文句がある。赤穗浪人は忠義を勵ましても切腹させられたんだから、こんな制札は謊だといふわけで、この文句に墨を塗つた者がある。嚴しく詮義をされたが、何者の所爲であるか、さつぱりわからない。そこで御制札を書き改められると、その晩のうちに又『忠孝をはげまし』のところに泥をうちつけて消

した者がある。これも犯人がわからない。仕方がないので又新しい御制札を掛けると、今度は夜中にその制札を引外して川の中へ抛り込んでしまつた。そればかりでない、品川、千住、四谷等の江戸の入口に掛けられた御制札も、同じやうに忠孝云々のところだけ、墨や泥を塗りつけてしまふ。けれども誰の仕業か更にわからないので、諸役人も持餘して、前の文句を『親子兄弟むつまじく』云々と書き替へた。それからはもう何處の御制札にも手をつける者が無かつた。かういふ所行をした者はごく〳〵下々の者、鳶の者や日傭取のやうな命知らずの輩が、かういふ惡戯をしたのだらう、といふのであります。

この記載によると、さういふ事をするやつは、政治の批判をしたわけなのですから、江戸ッ子の鼻ッ張がさういふところまで持つて廻れるとするならば、成程彼等の鼻ッ張も馬鹿に出來ない。けれどもこれは大謔であつて、日本橋の高札といふものは寛永以來時々文言を替へて居ります。この『忠孝をはげまし』云々の文句は、天和二年五月に改められたもので、都合六箇條あるうちの第一條なのです。將軍が替れば御制札の文句も多少改めて掛替へられるのが、例のやうになつても居りました。前の文句を、

一親子兄弟夫婦を始め諸親類にしたしく、下人等に至迄、是をあわれむべし

主人有輩は各其奉公に精を出すべき事、

と訂正されましたのは正徳元年六月の事で、赤穗浪人が切腹してから九年も後の事になります。この時は寶永六年に家宣が新に六代將軍になりまして、制札の文言を改めたので、家宣は先代綱吉のした事を殊更にいろ〳〵改めても居ります。さういふわけでありますから、『元正間記』にある制札の文句は如何にもその通りであるし、改めたといふことも事實なのでありますが、それは赤穗浪人が切腹した後、直に前のやうな事があつて改められたのではない。つまり『元正間記』の記載の方が間違なので、江戸ッ子の鼻ッ張は決してそんなところ

まで行くものではないのであります。

役人に降る瓦礫の雨

それから延享二年五月十一日に、お玉ケ池の旗本藤掛式部といふ人の邸宅へ市民が四五百人も集つて來まして、惡口を云ふやら、石瓦を投げますやら、表門を打壞して玄關の戸障子まで敲きこはした。主人の藤掛式部はその時家に居りまして、家來共に命じて、若し門より内へ入つて來るやうなら斬つてしまへといふことであつたが、中へは入つて來ない。これがなか〳〵長い時間あばれてゐたので町奉行所へ訴へて二三人の者を捕へました。この捕へられた者は遠嶋の處分を受けたのですが、一體藤掛式部が何で市民の襲擊を受けたかといひますと、この人は御先手頭といふ役をつとめて居つた。御先手頭は加役と申しまして、火付盜賊改といふものをつとめる例になつてゐる。今日で申せば憲

兵のやうなもの、軍人の警察なのでありますが、軍人を取締るのではなくて、火付と泥坊との取締をする役目である。式部は前年の九月二十八日からこの役をつとめて、この年の五月十一日に免職になつた。この人は如何にも嚴しい人で、過酷に咎め立をするので市民が隨分困つた。それで幕府の方へも首尾が惡うございまして、免職されたのですが、これを聞いて市民が襲擊して來た。まことに前代未聞の話だといつて、江戸では非常に珍しい事としてゐます。以後もさういふ事はありません。幕府の役人に對して市民が亂暴するといふことは、これまで例が無かつたのだから皆驚いた。けれどもこれも政治批判などといふところから來てはゐないので、意地惡く咎められたり、縛られたりしたことに對する腹癒せであります。松崎觀瀾は此の時にキホヒ組が參加して、暴動の主位に立つたことを指摘して、彼等の不逞を懲なければ亂世に導くことゝもなると云つてゐます。

それから天明四年四月七日、殿中で佐野善左衛門に斬られた若年寄の田沼山城守の葬式がありまして、神田橋の屋敷から駒込四軒寺町、只今で申すと蓬萊町ですが、彼處の勝林寺まで送る途中で、やはり石瓦が降つた。葬列が本郷へかゝりかけるところで、厄病神送りをするといふわけで、大勢の市民が囃し立て騒ぎ立てゝ押掛けた。何か知らんがやたらに騒ぐ。殆ど通行も出來ないやうな有様でありましたから、そのうちの數人を捕へて町奉行へ引渡した。が、勝林寺へ著く頃には、もう槨も何も壞れて、えらいものになつて居りました。一方寺へ著くのを待つてゐましたのが乞食のかたまりで、大勢の乞食が集つてゐる。いろ〳〵制して見ても、何分大勢の事で制しきれませんから、家來達が氣を利かして錢を遣つたが、少しの錢ではなか〳〵惡口を云つて承知しない。仕方がありませんから、乞食と妥協しまして、一人に錢二百と白飯一盆を與へる約束で、漸くこの葬儀を濟ました。かういふことも江戸には二度と無い事件でこの時がはじめてゞあつたのです。これはどうしたわけかといふと、田沼さんの政治を批判するといふやうな事から來てゐるのではなく、相手方の佐野善左衛門を『世直し大明神』といつてゐるのでも知れた事である。この時米の相場が非常に高うございまして、その最中に田沼父子は米の買占をやつてゐる。それが江戸中の評判になつてゐましたから、その意趣返しをやつたものであります。

それから天保十四年閏九月十三日、夕刻です。老中水野越前守忠邦が御役御免になつて、西丸下の御役屋敷から三田の中屋敷へ引取らうとする時、武士體の者もあれば町人體の者もありましたが、それが數百人も集つて來て石瓦を投げる。遂に辻番所を叩きこはすやうな騒ぎになつた。その時の落首に、

寒む空に辻番こわすむかふみづ

といふのがあります。これも政治批判から來たのかどうか。隨分水野さんの改

革は市民を恐れさした。水野の手先になつて町奉行の鳥居耀藏などは、大分江戸の市民を困らしたから、さういふ方からも來てゐます。けれどもこれは藤掛や田沼の時とは違つて、この暴行にはよほど不純なものがあります。天保度になりますと、もう大分幕閣の樣子も變つて參りまして、政權を爭ふことが大分あらはになつて參りました。この時水野忠邦の下には、筆頭でありましたのが土井大炊頭利位、それから堀田備中守正睦がゐます。眞田信濃守幸貫がゐます。が、このうち堀田は外交關係で、水野より二三日前にやめました。水野の評判が惡いし、堀田もうまい首尾でないところから、土井はこの兩人を排斥して、取つて替るやうな心持がありましたので、眞田を誘つていろ〳〵な運動をして居ります。ですから水野の屋敷であばれさしたなんていふことも、この土井の運動を助ける者共の指金であつたかも知れない。どうも一般政治上の事柄から、江戸市民が憤激したの、慷慨したのといふことは、江戸時代には無いので役人に向つてあばれるといふやうなことも、その根元は政治ではなくて、米の買占だとか、或は無理なひどい目に遭つたとか、さういふ事が原因をなしてゐるやうに思はれる。

差迫つた暴動挑發

それでは政治批判から來てゐない方の向意氣はどんなか、といつて見ると、これも團體でない方が多いので、團體的の行動はまことに數が少い。享保十八年二月に本船町の米問屋高間傳兵衞のところへあばれて行つた。これは當時の御用商人でありまして、幕府は當時米價の安いのを調節する爲に、二十萬石の米を買上げた。勘定奉行の細田丹波守の指揮で、江戸への入津米を高間に買はせる。來る船も〳〵いづれも高間が買つてしまふ。それですから相場はどんどん上つて來た。米價の調節の方は調子よく行きかけて來ましたが、それでは又

江戸市民の方がをさまらない。この高間へ押掛けたのは、麹町あたりの者の發起だといひますが、一町々々に幟を立てゝ、山の手、下町、芝、本所、下谷、淺草、江戸中總出といふやうな有樣で、高間の家へ押掛けて叩きこはした。珍しく此の暴動が團體的に纏つてやれたのは、恰も町々から御救米を貰ひに町奉行所へ出頭した歸り掛けを機會にやつたからです。さういふ機會がなければ團體的暴動はやれません。この時は高間のところ一軒だけでありましたが、これが高間騷動といつて後々まで話に殘る市民の一揆です。

その次が天明七年五月十九日の朝、大門通の米屋へ一人の大工體の者が米を買ひに來て騷ぎの種を蒔いた。それはこの米屋の店先に、十九日の何時から何時まで白米の廉賣をする、と書いた紙が貼つてあつた。米屋の方では覺えのない事ですから、貼札を見つけると直ぐそれを取除けてしまつたが、買手の方では承知しない。今まで貼つてあつたんだから廉賣をしろ、と云ふ。この大工が云募つて喧嘩になりまして、店の者が毆つて追返した。ところが夕刻になりますと、五十人ばかりの人數で、今朝ぶたれた男を連れて來まして、是非安い米を賣れ、と云ふ。店の方では云掛り者だといふので追拂はうとすると、その五十人の者共が店内へ亂入して、亭主を敲き殺し、家財器具をぶちこはして引揚げて行つた。これと同時に永代橋際の米屋が一軒、やはり貼札から買ひに來て喧嘩になるといふ同じ順序で敲きこはされた。それ以後はさういふ事なしに、いきなりあばれ込むのですが、二十日の朝に赤坂御門の外の米屋が一軒、南傳馬町三丁目で一軒たゝきこはされた。夜になつて赤坂から一ッ木、田町、あの邊ところの米屋が七八軒たゝきこはされた。二十一日には伊勢町、小網町、小船町、鎌倉河岸、下谷、淺草、小石川邊の米屋、もう問屋も小賣店も構はない、どん〳〵壞す。米屋ばかりぢやない、酒屋も質屋も壞すといふ風だつたので、町奉行が與力同心を率ゐて鎭撫に行きましたが、なか〳〵しづまらない。のみ

ならず町奉行の同勢に向つて惡口する、といふ勢であつた。その晩から二十二日の明方にかけては山の手が大分壞された。麹町から四谷へ出て、淀橋の水車に到る間、市谷の方は田町から牛込揚場通、筑土、傳通院、水道町、御簞笥町、といふ方面までずつとあばれた。角筈、千住、小塚原方面は二十一日にかけてやられた。二十三四日になつてもまだ騷動はしづまりませんから、市中の商店は皆戸締で居つた。二十五日になつて漸く店をあけるやうになつたが、この時の被害は八千軒以上あつた按配で、六日間に亙る騷動でありました。この時押寄せた人數は五千人程もあつたといひます。それが二十五組になつてあばれ歩いた。米の高いことはその後も度々あつて、騷動が起りかけては治まり、起りかけては治まり致しまして、遂に暴發することはありませんでしたが、團體的にあばれたのは、此等が主なものであるやうです。

人並な息子は惡少

さういふことはとにかく問題があることでもありますし、數も亦少い。何時も鼻ッ張とか、婆婆ッ氣とかいふことを云ふのよりは、話も大袈裟であり、被害も大きいのでありますが、江戸ッ子の身柄に相應したとでもいひますか、個人的にあばれるやつ、それに就ては、文化十二年に書いた『世事見聞錄』の中にかういふ事が書いてある。

店借の倅どもも、有福な町人が我儘勝手な事をして、贅澤をするのにかぶれて、自然不行儀になつて來た。無理な借金をして親の身上を潰し、家族や親類にも難儀をかけ、その果は惡者になつて、喧嘩をしかけて人を毆つたり、徒黨を組んで人の家を壞したり、仲直り酒を買はしたりするやうになる。これは自分の身上がよくなくつて、思ふやうに小遣も使へないから、自然さういふ惡い

事をするやうになるのである。町人の有福な者が我儘勝手な贅澤をして見せることが無ければ、さういふことも無いのであるが、御手本が出てゐるからいけない。殊に祭などがあると、若い者が元氣立つて、金持の町人のするのに負けない氣で張合つて、瘠我慢を出して、手許に構はず祭の衣裳などを拵へる。飛んでもない程の行裝をするのですから、どうしても大金がかゝる。親に難儀をかけるのみならず、親類や何かへ押借をしたり、姉妹や女房や娘を女郎に賣つたりする。それでもまだ始末がつかないで、祭が濟むと直に駈落をしてしまふ。それからあとは泥坊をしたり、騙りをしたりして、一生もとのところへ歸つて來ることが出來なくなる者さへある。さういふことは金持町人が悪い贅澤をして見せる、その景氣に浮れて仕出來すので、今日の若い者はよく〳〵律義愚鈍で一人前に足らぬ者でなければ、親の側などにはゐない。人並の息子であれば、まだ若いうちから放蕩を始めて、勘當されるか、自分の方から家出するかして、無宿となり、居候となる。さうして方々から江戸へ集るあぶれ者と一緒になつて、立派な悪黨になつて悪い事ばかりしてゐる。強請に行くとか、喧嘩に行くとか、人の妻や娘を騙し賺して物を取つたり、引張り出して女房にしたり、それから又手切金を取る。さうでなければ賣り飛ばしてしまふ。悪所盛り場のやうなところへ行つて、いろ〳〵邪魔をして、錢を出さずに濟む酒や肴を飲み食ひし、その上に賣女を慰みものにして、まだ足らないで難題を吹かけて金を取る、といふやうな悪い風に今はなつてゐる、といつて指摘してゐます。

元日に漸く松飾

この本は武家の手に成つたものでありますから、どうも町人憎みの風がある。これは一部の悪少年の模様を書いたもので、大體はもつと罪の無いものだ

つたのです。町人の金持がこの時分には非常に目立つて參りまして、この町人の眞似をすることが武士の仕癖にもなる程であつた。江戸に惡少年が出來るのは、金持町人の我儘、贅澤が見本になるのだ、といつて指摘してゐるが、武士の風俗を町人に似せてゐるのも同じ事でありませう。何故武士が町人の眞似をするかといへば、その資力が豐である事、生活が自由である事、すべて勝手な事が餘計に出來るからなのでありまして、武士の方は大名をはじめとして、年〳〵の收入にきまりがある。從つて金を遣ふことも思ふやうにはならない。町人の方は何程といふきまりが無い。儲け次第、從つて又遣ひ次第である。それから又大名は勿論幕府といふものがあり、大目付などといふものがあつて、それ〴〵の取締をする。一般武士としては、頭支配といふものがある。今の言葉にすれば所屬長官でせう。一定の規律があつて、窮屈千萬なものだ。武士の取締といふことに就ては、幕府は陣中の制度から持つて來たやつですから、ぎしりとした締りがある。然るに町人の方にはさういふものが無い。どうも町人の方が自由で、さうして資力がある。自然羨ましくなるから、これを眞似るやうにもなる。それもこの頃では、もう肚の中で思ふだけでなく、形の上に現れるほど烈しくなつて來た。それもその筈で、實際に武士は町人の爲に利益を搾られてゐるやうに感じてゐた。大名にして見たところが、藏元といふものがある。これがその國で取れるところの米を引取つて、金融をつけてくれるわけのもので、又臨時の金に就ても金主を搜して來る。この方の働きが鈍ければ、諸大名の金方役人はつとまらない。つまり藏屋敷といふものは諸大名の遣繰事務所で、隨分苦しい遣繰もしたのであります。

それですから身上のいゝ大名といはれる人は一萬兩借りるのに五百兩、貧乏大名といはれる家では、千兩借りるのに二百兩かゝつた。これは御馳走をするとか何とかいふ振舞の費用で、借出の費用がどうしてもその位かゝる。勿論利

息の外の話です。その上にまだ利息まで取られるのだから、町人に締め上げられるやうな氣がしたのでせう。貧乏でもない、金持でもない、何方かといへば身上のいゝ方に數へられた藝州侯などさへ、暮に押詰つてから金方の役人がいろ〳〵金策をする。いづれ借出に大坂へ行くんだけれども、その方の調達がしつかり出來るか出來ないか、それがわからない爲に、三十日になつても、三十一日になつても、金方役人の家では松飾をしない。漸う調達の話が纏まり、工夫がついて、夜が明けて家に歸ると、もう元日である。それからはじめて松飾をしたといふやうなこともあつた。大坂町人の『畏りました』といふ一言を聞かない爲に、藝州侯の御金役人數人が、春を迎へる支度も出來ない、といふほどの有樣でありました。

仕送用人や質屋通ひ

これはほんの一例に過ぎませんが、貧乏な大名でもないのに、さういふ狀態であつた。又旗本衆などになりますと、仕送用人なんていふものがありまして、これが一切家計を引受ける。仕送用人の働きによつて、町人と程よく對談して暮し向を立てる。これはなか〳〵手腕家でなければ出來ない事で、佐藤病院を拵へた佐藤泰然のお父さん、今の鄕男爵のお父さんなんていふ人達は、皆この仕送用人だつたのです。もつと低い御家人衆になりますと、質屋の使を出入の町人に賴む、といふやうなことがあり、もつと下の御家人になれば、內職の取引先まである。內職をしなければ食へないのですから、內職を出してくれるところ——無論町家です——そこで前借をする、といふやうなこともある。それですから、とても町人に頭が上らない。

酒屋の御用が來ない

山の手や本所邊の屋敷になると、御用聞の逃げる屋敷がよくあつた。酒屋も肴屋も何も入らないから、欲しい時には現金を持つて買ひに行かなければならない。さういふところになると、又自分で出て行つて、『何々が欲しい、代は屋敷へ取りに來い』では、品物は渡せません。それで賣つたら、屋敷へ貰ひに行つたところで、決して取れつこない。だから現金買より外に出來ないやうな有樣であつた。たまに騙し賺すやうにして御用聞から酒を取り、又は店から借りて歸る。その位の事でも、餘程御世辭でも使はなければ借りられない。從つて町人に頭が上らないのですが、貸倒は隨分あつても、まだ町人には相當の利益が擧り、商賣が成立つて行くのを見ると、どうも町人がうれしくない、憎らしい。さういふ心持から、『町人憎み』といふものがあつて、町人を征伐したいやうな心持があつたことは、隨分いろ〳〵なものに出てゐます。『世事見聞錄』はさういふ人達から眺めたものでありますから、江戸の若い者の話もよほど選擇をして聞かなければならないわけである。併しながら、それでは『世事見聞錄』に書いてあることは、悉く『町人憎み』から來たものであるかといふと、さうでもない。全くの事實もあります。それが何處まで事實であるかといふことを、詮義しなければなりません。

日本中の手本

江戸の人は大體に土地自慢の風が甚だ強くつて、江戸ほどいゝところは日本中に無いと思つてゐる。それが土地柄がいゝとか、人氣がいゝとかいふことからではない。その心持は將軍樣の御威光といふものを笠に著てゐるのであつて然もその笠に著てゐることさへ知らずに居る。『養心談』の中に、

江戸者ハ江戸ガ政ノ出所故ニ、江戸ガ日本ノ根本ジヤ、江戸ガ手本ジヤ、江戸ガ定木ジヤ、江戸デヨヒト云ヘバ、日本中デヨヒト云、江戸デアシヒ

ト云ヘバ、日本中ドレヘ行テモアシヒノジヤト思フ氣味ナリ、何ノ國ニ行テモ、サキノ國ノ風ノ江戸トチガヒタルヲ直シテヤル心ニナルガ江戸者ノ風ナリ、故ニ江戸者ハ己ガ定木ノ氣故ニ、他ヨリ直サレルコト甚キライ也、人ノ直シヲ受クル氣ナキ故、仰グコトナキ也、

と書いてあります。これが將軍樣の威光を笠に著てゐるので、江戸といふところは政治の出所であつて、その政令が全國に行はれる、そこから來てゐる。さうしてそれを江戸の土地柄だと思つてゐる。これは江戸の庶民だけではない、士でも中にはさう思つてゐた者もあつたのです。それですから又『稽古談』といふものには、

江戸ノ民ト云フハ、風俗ヤラ人ノ云フコトヲキクコトヲイヤガル、智ノフヘヌ理ナリ、タヾ心剛ニテ氣モフリシヤリトシテ、人ノ云コトヲ、ハネ付ハネノケルコトナリ、コレハイカサマ御入國ノ節ヨリ、シキリニ武風行ハレテ一寸モヒカヌ、チツトモ人ニマケヌト云風ヨリ出タル風ト見エルナリ、干戈動クトキ武士、日日ノ樣ニ甲冑ヲ著シテ合戰スル時ハ極々ヨキ風ナリ、少シモツヨキガヨキナリ、フリシヤリスルガヨキナリ、人ノ云コトヲモハネノケルガヨキナリ、唯腕筋ノイカニモ達者ニテ、氣モ極々剛ナルガ勇士ナリ、今ノ時ハ干戈動カズ、合戰ハナシ、何モケ樣ノ人計入用ト云フ世ノ中ニテハナシ、イカサマ武家ノコトナレバ、武備ハナケレバナラヌナリ、備ノ外ハ武風ニ及バヌ事ナリ、江戸ノ風ハ武風故ニ、民ニモ此武風移リテ皆剛ナリ、既ニ民ハ武備ヲセネバナラヌト云フモノニテハナキナリ、サレドモ一統ニ武風ナルユヘニ、民云フコトヲ聞カズ、ジヨウコワク、人ガ右ト云ヘバ左ト云フ、左ト云ヘバ右ト云テ、喧嘩ヲカフコト、矢張昔ノ男達風ノコリタルナリ、男達モ干戈サワギノトウザノ風ニテ、今ニナリテ見レバ、甚不禮失禮、狼戻ナル惡風ナリ、江戸ハ民マデガ此風ユヘニ、ツイ

諸國へ此風移リテ、城下々々ノ民ハトカク江戸風ノ男達ノ風ナリ、政右ナレバ民ハ左ト出ル、政左ナレバ民ハ右ト出ル、上ノ威ト闘テ勝ッ氣ナリ是惡風ガ諸國へ移リタルト云フモノナリ、

と云つて居ります。これは著者の海保青陵が江戸の人でありまして、それ故に徳川氏を高く買ふ。徳川氏が覇業を江戸に開いて、丁度この本を書いた文化文政度まで、二百年近く續いて來たといふことから、大變江戸者の風儀を高く買つて居るのであります。江戸者の風儀を高く買ふといふよりも、徳川氏の御利益を高く買つてゐるやうに思はれる。江戸の人民が氣が強く、向意氣が強いといふことは、坂東武者の遺風であつて、徳川氏が入國したから、それだけで鼻ッ張が強い、武士風になつたといふのではない。早いところで頼朝が鎌倉に覇業を興したのも、尊氏が京都へ攻上つて室町幕府を拵へたのも、皆坂東武者が全日本を壓倒したのであつて、坂東武者の骨ッ節の御蔭であつた。北條早雲が上方から關東へ出て來て、關八州を取つて上方を威嚇してゐたといふのも、亦坂東武者の力でありました。さういふ人氣であるから、それが秀吉の小田原征伐の時に敲き潰されたからといつて、俄に全く無くなつてしまふといふことはない。秀吉が關東の城々を攻め破つてしまつたので、統帥といふものが無く、團結といふものが無くなつて、纏まつた權力や資力からは離れてしまつたが、それは軈て土豪となり、土族となり、泥坊となり、博徒となつて殘つて來た。そのなぐれの端が江戸ッ子である。坂東武者の氣を享けた者どもであつて、この傳來は決して一朝一夕のものではない。たゞ統帥を得ないし、團結が無いから、ひとりでに大きな働きが出來ず、個々の者になつて勢力を失つてしまつた上に、權力や資力からも離れてゐるので、だん〳〵に傳來の氣が薄くなつて、度胸の無い、腰の弱いものになつてしまつたのであります。ですから徳川氏の入國で武士の風を江戸に傳へたなんていふことは決して云へない。だが徳川氏

が武士の都を拵へた、勿論それが無影響だといふのではない、下地があつた、京大阪と違ふのは其處だ、けれども大した事は無論出來ないが、上の威光、卽ち政府に對し、又大名旗本その他身分の上な者に對しても、鼻ッ張が強いといふわけにも行かない。

町入能の狼藉

併し代々の將軍には御大禮能といふものが大概五日づゝあつて、そのうちの一日を町入能といふものに充てられる。午前と午後と二別れにしまして、江戸の名主以下の町役人共に能を見せるので、御能拜見と稱して、江戸中の公吏が出て行つた。これは御本丸の大廣間の南庭の舞臺で、表御能と稱したのでありますが、この時正面に御簾を垂れて將軍が居られる。それから下段の方に御三家、御三卿、老中、若年寄といふやうな人達が居る、といふ風に、一人一役の人がづらりと竝んでゐる。町奉行などは殊に世話役でありますから、場中の立働きをしなければならなかつた。當日は老中以下の人々は皆式服で、堂々としてその座に臨む。町から入つて來た公吏どもは、脇正面の白洲で見物するのですが何分大勢のことですから、押重るやうになつて詰込まれる。これは昔からの定まりで、無禮があつても差許される例でありましたから、町方の者も遠慮なく勝手な事を云つたりしたりする。若年寄が出て來て、樂屋に向つて『始めませい』といつて聲をかける。さうすると能が始まるのですが、同時に上段の御簾が上つて、將軍の姿が見える。それをきつかけに、『やあ大將、親玉』といつた工合に、將軍の事をすらいろ〳〵掛聲をして、褒めるのだか、冷かすのだかわからないことを云ふ。老中、若年寄になると『何の守しつかりしろ』とか、『禿』、『白髮頭』とかいふ調子で、顏の造作から一擧一動に至るまで、雜多な批評を加へる。町奉行に至つては、『間抜、馬鹿』といふやうな罵聲さへ浴せられる。さ

ういふ惡口を將軍が聞かれて笑草にされるといふやうなことであつた。さういふ時には大に元氣を見せるやうでありますが、これは一方で無禮を許されて居るから、さういふ事をやつてのけるので、刑罰を以て之に臨む場合には、それをうち踰えてまで惡口することは出來ない。それですから海保青陵のやうに、『上ノ威ト鬪テ勝ツ氣ナリ』といふのは甚しい買被りで、そんな意氣地はありはしない。ちよいとした負けぬ氣だけの話で、徹底した元氣があるんぢやない。この根性を最もよく現してゐるのが半彫の文身である。墨だけ入つてゐたり、手足だけ彫つたり、江戸ッ子なるものゝ文身には、すつかり出來上つてゐるものが甚だ少いので、江戸ッ子の根性がよく文身の上に現れてゐる、とでも云ひたいところだ。これは錢が續かなくつて彫りきれてないのもあり、苦痛に堪へないでよしてしまふのもある。文身の話は前に書いて置いたことがあるから、少し話が横道に入るやうですが、それをこゝへ出して置きませう。

お袋の腕に親仁の名

天正十五年二月十七日、大和大納言秀長卿が、上方勢六萬餘騎に中國勢三萬餘騎を加へて、總軍九萬といふ大勢を以て、三原彈正の籠つてゐる日向の高城に取詰めました。

その時島津中務は、二萬餘騎の同勢で、目に餘る上方勢に奇襲を試みて、必死の薩摩勢は、五百ばかりその場で討死を致しました。その討死した薩摩勢の屍の腕に、『今月今日討死何の何某』と一々入墨がしてございました。

これには、上方勢も大に驚きまして、薩州勢の猛氣のほどを嘆賞いたしたさうであります。

同じ入墨でございますが、これとは事替りまして、『お袋の腕にしなびる親仁の名』、かういふことになりました間は、百八九十年の隔りで、二百年とは經つ

て居りません。

『親に貰つた五本の指を四本半には誰がした』といふやうな心意氣から、薩摩勢の入墨を見較べますと、それこそ今昔の感に堪へないわけでございます。

これはまだ二百年近い隔りでありますが、天正からは八十年經つか經たない頃、もう女の入墨といふものが盛でありまして、これは、遊女からはじまつたことらしうございます。

寛永の頃に、大阪の野間屋の作彌といふ遊女、是は太夫ではありません。天神といふ第二級の遊女でありますが、此女に七郎右衞門、七兵衞といふ二人の客がありまして、作彌は肩先へ『七さま命』と彫つて、二人のお客を喜ばせたさうです。

また京の或る遊女は、肩から腰へかけて男の本名、替名と、仇文句とを長々と彫らせた。太夫では小藤といふ女が左右の腕に彫るのは古いといつて、指の股へ男の名を入墨にしたなぞといふ話がありました。それが延寶度になりますと、彫り入れる形も略々一定いたしまして、『髪指爪のみつをきり入ほくろのいろをかへぬ』といふことが、心中立の最も凄じいものにされて居りました。

『諸分店蓙』にも、『此中あはんす心中のよき女郎とやらんに、如何様なこともさせて悦ばしやりませ、入ぼくろはいいてぢやが、首丈の男にあひます。ちとあやからさんせ』といふやうなことが書いてございます。この頃は『入痣』とも申し、『掘入』とも申して居ります。

思ふ女の紋所

が、何にしても、入痣は遊女の深い思入を示すものでありました。最初は男の方から所望して彫らせることはありませんでしたが、後には男が望んで彫らせるやうになりました。

その彫らせる文字も、他の客を寄せつけないやうに、我物であることを見せかけようとしては、露はな文字を彫り込ませる。又た他の客へ障らないやうにといふ心持から、マブとでもいつたやうな人は、わざと隠し言葉抔で、ちよつと知れにくいやうに入れさせました。

この頃の彫り物には、畫といふものはありませんで、皆文字でありました。男に書かせて、その筆蹟を遊女が自ら彫る――といふのは大分凝つた遣方のやうになつて居りました。それは、

勘兵衛といふものに　カンサマ命
徳右衛門といふものに　トクサマ命
九郎兵衛といふものに　クロサマ命
川といふかへ名ある人に　カハサマ命
重といふかへ名ある人に　シゲサマ命

といふ風に、男の名の頭字を命といふ字と續けて彫り入れる。また模様を替へては、

十兵衛といふに　二五命
九兵衛といふに　三三命
三右衛門といふに　山命
藤兵衛といふに　フヂ命
平兵衛といふに　ヒラ命
清右衛門といふに　キヨ命

といふ風に彫り入れる。この命といふ字を添へるのは、『命に替へて』――又は『命限りに』といつたやうな心持の表示であります。

遊女の入墨もさう型がきまつてしまふ頃になりますと、中間、馬方、船頭などゝいふ手合は、それとは違つて遊女の紋所などや、題目、名號、念珠、又思

ふ女の名前を彫つて、それを伊達にするやうなものがありました。

こゝで漸く畫を彫るやうになりましたが、これは多分女の紋を彫ることが最初であらうと思ひます。

强がつた相撲風俗

乙由の書きました『それ〳〵草』――あれは寶永元年の板行でありますが、その中にも、『古より若き者の心中とて、入墨痣を專に傳へ、半は髪きり指を切る事專らなり』とあるやうに、男女ともに入痣が、情事の起請のすぐれたものに見られて居ります。

男も女の名を彫るのです。併し入痣といふものは、情事について廻るもの、廓について廻るものでありましたが、念佛や題目を彫る心持のうちには、戀に殉ずる覺悟が出來て居るといふ心持、それは一轉して强みを見せるものになつて行きます。

元祿十六年版の『傾城百人一首』の中には、『入ぼくろは相撲取のわざだ』と書いてあります。刺靑といふものは、ここで情事と强みとの二種になつて來た。ここから眺めて行くと、これがその後どう育つて行くかと考へられもする。

元祿の頃迄は、相撲取が職業ではありませんで、强がりが云合せて興行するので、後々のやうに相撲を取つて飯にするのではありません。協會もなければ團體もないのですから、八方から寄合つて來て相撲を取るのですから、その時分は寄相撲と申しました。この前後に於ては、相撲好はいづれも力自慢の强がりであります。無賴漢の仕事にきまつて居りました。

男達と稱する連中などにも、相撲好が澤山ありました。これらの手合は朝夕イカモノ食ひといつて、無法な暴食を致します。自分の腕にもいろ〳〵なことを反故染のやうに刺靑をさせて居りました。さうした風俗を相撲風俗と申しま

した。

これらの相撲好のものどもの間には、往々にして暴漢といはれるものを生じました。その中でも有名なのは大阪の雁金組ですが、あればかりではなく、各地に雁金組のやうなものがありました。さうして、遊廓の中の喧嘩を法律の外に置いてありました爲に、強がりが無法に強みを見せるのに、法律の外にある廓が最も都合がいゝので、廓の中の喧嘩が最も甚しうございました。その弊に堪へられませんで、廓の中の喧嘩も法律のうちから除外しないやうに改正されましたのも、このごろのことでありました。

其廓の喧嘩が甚しかつた時分、相撲風俗の人間も多く、その中には遊女、茶屋女、人の女房、下女、腰元、娘、比丘尼、惣嫁、それから若衆、野郎、影間、それらの一度でも關係しましたものゝ名前を、一々兩腕に彫らせた、まだ足りなくて背中一面に彫り、それでもまだ足りないで胸、脇腹までそれを彫りつける。さういふものを綽名して、『過去帳男』といふやうな唱へも出來ました。

人嚇しの死次第組

この時刺青の面積がひどくひろがつて參りまして、それと共に、これらの人間を世間からひどく厭がります。

世間から嫌はれるにつけて、また刺青の意味も變つて參りました。

近松の『油地獄』に、『人嚇の腕に色々の彫物』といふこともあります。『色縮緬百人後家』には、『供の久七、目にかどたて、まなこあいてとをれ、うつけめと、うでまくりして、かひなの入ぼくろを見せての力じまん』などと書かれて居ります。嚇しつけて力む心持を入痣に見せる。それは上方のみでなく享保の江戸を騒がせました死次第權三郎。大工、左官、屋根葺の弟子等をそゝのかして、大勢若い者を引連れて、江戸の町中をあばれて歩きまして、死次第組と申せば

八百八町で厄病神のやうに思はれました。

この權三郎の背中には、大きな字で『死次第』と彫つてありました。

上方では、大字でする刺青はありませんでしたが、江戸ではこの權三郎のみならず延寶の男達の鐘彌右衞門は、肩先から六字の名號を大字で彫らせて居りました。それから寶曆になりますと、『一心命』、『命不入八幡大菩薩』などと彫ります。女の生首などをも彫らせる、刺青の上に少し趣向が出て參りました。

それから『下手談義』には、『片肌ぬぎて、なでさする腕を見れば、肩さきより手首迄、此所小便無用と籠字に入墨子、扨も〳〵見事な御細工、嘸是を彫らしやる時は痛みましたで御座りましよ、ハテつがもない、そんな事でほらるる物か、これがきほひの表道具、尤痛さはいたかつたが、畏りて居るよりはるかに堪へよい。なんだかしらぬが、おらは半時小笠原をやると、向ずねが碎けるやうでいま〳〵しゐ』とあつて、籠字の刺青のことが出て來る。刺青をするより坐つてゐる方が骨が折れるといふので、ちやんと畏つてゐることを小笠原流の禮法と心得てゐたらしい。

さうした人柄が、この本文の中に見えてきます。是で如何なる階級に刺青が行はれたかも知れませう。嫌れるほどの人柄でも趣向はある。籠字の刺青といふものが、思ひつきのものでなくもありますまい。

見せ附けた男自慢

さて寶曆の初と明和の初と申しますと、十年内外の違ひでありますが、刺青の樣子がガラリと變つて參りました。

明和度の心持で申すと、刺青といふものは元氣のいゝ血氣盛な表示で、上方の人間共などに出來ることぢやない。關東の人間でなければ出來ることぢやない、といふ妙な誇が眺められる。この模樣は、『諸道聞耳世間猿』に出て居りま

す。さうして畫が大變に殖えた。文字を彫ることは衰へて、專ら畫を刺青にすることが流行つて來た。『諸道聞耳世間猿』のしまひの方に、『江戸の競だて衆は入墨ばかりか身うちに龍の纏ひついた所、背中に眉間尺の首、尻こぶたに近江八景、弘法大師がござらば般若六百卷でも彫てもらひかねぬ血氣壯。それが何の爲なら、上方野郎はなまぬるいとの力味から、滿足に生れた體を我と支離にならいでも、男は男で通ればこそ江戸中がそふもなし』とあつて、江戸の男の自慢を刺青でするやうにいつて居りますが、さればとて江戸中の人間が、悉く刺青だらけの人間になつてしまふわけではない。この本文の結びは、さすがに凄じい言葉だと眺められます。

この時に濱松歌國は、回顧的に大阪の刺青の模樣を說いて居ります。元祿、享保の間は達衆が多かつた。それが元文、明和になると、がむしやらに意地を立てる奴が多くなつた。何でも頭立つた者にならうとして、無法我儘を働いて牢屋入りを手柄に心得、死罪遠島になるのを苦勞にしない。

さういふ手合どもは、ちよつとしたことにも大肌脫になつて、其腕には倶利伽羅不動、般若の面、眉間尺、獄門、轆轤首などの入痣を、胸へも腹へもところ嫌はず彫る。まるで腕白の手習子供を見るやうに、ところ嫌はず彫り散らされる。といつて、さうした凄じい刺青をした主立つた人の名前を擧げて居ります。

茶船五郎右衞門、芝田ノ忠兵衞、宇野金十郎、硯箱ノ勘右衞門、鐵ノ太兵衞、古手ノ吉兵衞、櫛の彥兵衞、大工ノ與兵衞、燒繼ギノ長右衞門。

これらの好みを見ましても、上方でも刺青の樣子は畫面が多くなつて來たことが知れます。

日本中の刺青の意味もこれでわかり、どんなものを彫るのが流行つてゐたといふこともこれでわかる、隨分刺青といふものも盛になつて來たやうであります。

すが、それから間もなく寛政の改革に突當りまして、大變流行つてゐた刺青も一時鎮靜いたしました。それが又頭を擡げて參りましたのは、文化文政の頃でありますす。

文化七年九月の刺青法度を見ますと、近年輕い者が總身へいろ〳〵な畫だの文字だのを彫るものが多い。これをそれ〴〵の處分にするのは勿論、賴まれてそれを彫つたものも咎がある、といふ觸を出して居ります。寛政の改革で一時下火になりかけましたが、何に致しても持越してゐる流行でありますから、頭に血の多い人間と共に、それはなか〳〵無くならない。

文政の初めには、一人の泥棒が押へられて、愈々死罪ときまりまして、刑罰を受ける時になりますと、首から肩先へかけて大文字で、『東照大權現』と彫つてございました。

さあ、誰も幕府の時世のことでありますから、家康公の神號に刄物を加へることが出來ませんで、これは大問題になりました。さりとて無罪にする譯には行かないのでありますから、遂にこれは永牢といふことになりました。かういふ話草を傳へて、世間の噂を喧しくいたしました。

歌右衛門の刺青人氣

ところで天保四年九月には、四代目の歌右衛門――この頃はまだ芝翫と申して居りましたが、これが中村座で、上方へ歸る御名殘狂言に、倶利伽羅太郎になりまして、兩方の腕へ倶利伽羅龍の刺青を致しました。それがなか〳〵大評判で、芝居が大入であつたさうです。

一體四代目歌右衛門は、小づくりな男でありました。初役で夏祭の團七九郎兵衛をしまして、例の泥仕合の場で素裸になるのでありますが、身體が小さくては見立が無い。そこで工夫をしまして、全身へ刺青を描いて登場しました。

それが大當りでありまして、其後團七九郎兵衞の役は、必ず全身へ刺青を描いて登場することになりました。この四代目歌右衞門は、刺青の流行を――偶然ではありますけれども、煽る役者だつたのであります。

さうして又、この時分は、國芳の水滸傳の豪傑の錦繪、これが大變に賣れた時で、江戸で伊達な者は、いづれもこの水滸傳の刺青をした。一體國芳の水滸傳の一枚繪は、何に致しましても百八枚續くのでありますから、地本問屋でも澁々してゐたところが、愈々賣出して見ると非常に賣れて、百八枚を無事に出板して、大變な利益を得たといひます。

これはその繪柄が刺青に似合はしいので、この錦繪が大變賣れたのであるさうです。それですから當時のことを書きました中に、物數寄が大勢寄合つて、今日は吉原へ行くんだが何か趣向は無いか、といふところから、國芳のところへ行つて藥で刺青を書いて貰つて、勇みな職人になつて吉原へ繰込まうといつたやうなことをするものも、だん〳〵あつたといふことが見えて居ります。

お大名様の彫り物

また天保八年八月十四日、下總小見川一萬石、内田伊勢守正容が不行跡の爲に隱居を仰付けられました。

この伊勢守といふ殿様は、四千五百石取の石河甲斐守貞通の三男で、小見川へ養子に來た人であります。親は御詰並といひまして、旗本ではありますけれども、大名の取扱を受けてゐる身柄で、さうして己は婿に來て大名の身分を得た人である。

ところが、これがなか〳〵亂暴な男で、町藝者を落籍して屋敷へ引込む、深川や向島へ船で出かけて、女郎と手を引合つて歩く。如何はしい女を大勢連れて川崎大師參をする、といふやうなことが度々ありました。さうしてこの殿様

の身體といふものは、種々様々の刺青がしてありました。

刺青のあるので名高いのは、遠山の金さんでありますけれども、あれは祿の低い人の次男であります。出羽様の隱居の南海――不昧公のお父さん――この人も刺青で名高いけれども、これは側女中の身體へ刺青をさせて、帷子を著せて召使つたといふのです。

江戸三百年の間に、お大名の當主の身體へ刺青をしたといふのは、この伊勢守だけで、他にもう一人もありません。

山の手下町刺青競べ

かういふわけで、もう刺青の流行といふのは、滅法界もないことになつて居りました。

小石川の傳通院前の茶漬屋、これは辰巳屋惣兵衞といひまして、年を取つてまで島田髷の鬘や振袖を著て、ワルミの踊が上手で、方々のお祭へ出て、やんやといはしてゐた畸人であります。

この惣兵衞の伜、二代目の惣兵衞。この人が身體中に刺青をして居りましたが、これは山の手きつての刺青だといつて、當時褒められて居りました。

さうすると、或日神田から一人の男が來まして申しますには、お前さんは今江戸一番の刺青をしてゐるといふ話だが、私も神田に住つて、人にまさつた刺青をしてゐるつもりだから、まあ江戸一といはれるお前さんに、どうか見て貰ひたいとも思ふし、お前さんの評判の刺青も見せて下さい、といつて所望した。

そこで辰巳屋は、お前さんは何にしろ江戸前だ。わしは何といつても山の手の者だから、とてもお前さんと刺青較べをするわけには行きません。けれども御所望とあれば、あたしの刺青をお目にかけても差支無い。といふと、もう肌を脱いで見せました。

身體中が筋彫といふやつで、ごくこまかい。朱入、金入といふやつで、實にこまかい、綺麗な刺青だつたといひます。神田から來た男も、これは如何にも立派な刺青で申分はありません、といつて褒めた。

さあ、これであたしのはお目にかけたから、お前さんのを見せて下さいと、辰巳屋がいふと、神田から來た男は、それでは私のを見て貰はう、といつて素裸になつた。けれども身體中に一點の針の痕も無い。どこに何が彫つてあるかと思つて捜してゐると、神田から來た男は褌をほどいて辰巳屋の前に突立つたそれから辰巳屋がよく目をつけて見て、やがて膝を叩いて、成程これは無類だ、といつて褒めた。こいつは又奇妙なところに彫つたもので、××の頭へ蚊が一疋彫つてあつた。これは痛み場所ですから、とても容易には彫れません。

やつとのことで彫りましたが、これは二人とは無いつもりでございます。といつてこの男は自慢をした。刺青の流行はかういふところにまで及んで居ります。

又その時代でありますから、女もなか〳〵負けちやゐない。湯島のおよしといふ女、鳶の者の女房だつたといひます。これは内股へ鋏を持上げた蟹が匍ひ込むところを彫らせてありました。本所のおかくといふやつは、臀のところに蟹が匍つて行く樣子を彫らせてあつた。また或女は、背中に雷を彫らせて、その雷神が糸を長くつけた錨を股倉へ、ぶら下げて引掛けやうとするところを彫らせた。或は又脇腹に肥取男を彫らせて、その柄杓の柄を取延べて股倉へ入れるやうに構圖した女もある、さうした怪しからぬ圖按の彫物をした、惡いたづらな女も出て參りました。

宿場女郎に蟒お由

それが天保十二年十二月に再び法度が出ました。文化八年の法令を繰返したのでありますが、鳶人足、駕籠舁渡世の者には、刺青をしてゐない者は無いと

いふ文句が、その中に見えます。

その他これに類似した輕きやからのものは、殆ど皆刺青をしてゐる。さういふものは召取つて屹度申つける、といふことを申添へてありますが、刺青はなか〳〵そんな低い生活者だけではなく、もつと上の方にまで及んでゐたのでありますが、天保改革の嚴しさで、それが再び下火になりましたけれども、水越の御趣意は、寛政改革よりも利目が短うございまして、直にまた昔の通りになつてしまひました。

新宿の豐倉の女郎の蟒およし、これは胸に一面蟒を彫つて居りました。

この豐倉といふうちは、豐倉のおくらといふのがゐまして、家名を名乘つた賣れッ子で、此の女が落語の七人廻しのモデルになつたやつで、豐倉は嘉永安政度の新宿では、なか〳〵名高かつた娼家であり、お倉も亦大評判な女でありました。

今日もこの豐倉の跡は、新宿三丁目の南側で、藤村といふ寫眞屋になつてゐるところがさうですが、この女などは刺青の爲に評判であつた女です。幕末になりますと、なかなかさうした女も多く、明治になつても雷おしんのやうな、身體一杯、雷様を彫つて、それで名高い女もありました。

男とは武士のこと

上といふ言葉も、士農工商の中では士が一番上ですから、その士に對して反抗する氣分がある、といふ位に取つて置けばいゝが、それもごくあつさりしたところで、それ以上に『上ノ威ト闘テ勝ッ氣ナリ』といふ言葉を買ひ上るわけには行かない。御役人といへば、町方の同心にさへ頭が上らない。『八丁堀の旦那様』といふわけで、米搗バッタのやうなザマである。その位強くない江戸者なのでありますから、若しこれに侮られるとすれば、侮られる武士の方に

も、それだけ弱いところ、隙があるからだと思ひます。

それから又海保青陵は、男達風のことを云つてゐる。この『男』といふのは、武士の事をいふので、『男をやめる』といへば、歸農か歸商かしてしまふことである。從つて男達といふものは、大概武士の筋目であります。さうでなくつても幕府の初から武士の失業者が澤山ありまして、所謂浪人者が澤山市井に入込んで居ります。吉原を拵へたと云はれて居る庄司甚右衞門は小田原の浪人、芝居をはじめた中村勘三郎は中國浪人です。米河岸を拵へた伊勢善次郎、これは小田原の浪人、成井善三郎は常陸の浪人です。えらい俠客といはれた幡隨院長兵衞は肥後浪人です。かういふ風に數へて參りますと、江戸の各町の草分であつた人々には、大分浪人があるわけになる。それだから男達風が武士風の名殘であるとはいへるけれども、武士の風が移つた姿だとはいひにくい。

浮氣な旗本奴

奴風といふものが寛永から起つて、萬治、寛文度には最も盛であつた。これを『六方』といつて居る。これは武家の奉公人で、身柄の輕いものですが、それらのすることを輕快であるとし、面白いとして、それを學んだものが旗本奴、これは鶺鴒組とか、よしや組とか、大小神祇組とか稱して、江戸の町中をあばれて歩いた。『六方浮氣』と續けても云つて居りますが、『浮氣』と申しても、この時分のは後にいふ『浮氣』とは違つて、空元氣といふやうな意味にも取れます。その時分には旗本のする奴ぶりを面白がつて、大名がそれを眞似た。これが大名奴で、大分諸大名の中にあつた。水戸の藩祖である頼房や加州の前田利常なども、盛にやつた一人でありました。さういふ風に奴ばやりであつて、世間がそれを凄じいものに見る。そこでこの眞似をして起つたのが町奴、これも鐵

棒組、笊組、唐犬組などといふいろ〳〵な組が出來てあばれ歩いた。この連中の頭は絲鬢でありまして、猿眼に釣髭、もみ髭をしてゐる。絲鬢といふものは下郎の頭にきまつたやうに思つてゐるが、家康の像のみならず、武田信玄の像などを見ても、やはり絲鬢に畫いたり拵へたりしてある。兜を著る時に都合がいゝから、戰國時代に多かつた風なのです。奴の絲鬢も武張つた心持があるので、兜を著る身分でもない者まで、さういふ風を好んだ。猿眼は頰當を當てた眼ざしであるし、釣髭やもみ髭も頰當を著ける時の便宜から、さういふ風に仕立てるので、つまり武具に身を固めた時の樣子を見せたものである。

供を割らせない方法

それから張臂、これはどういふものかといふと、槍持が供先で肩を合せ、臂を張つて行列を作つて行く。その時に供先を割られぬやうに、身構へてゐる形なので、後にはたゞ形容だけのやうになつてしまつたが、元來は他家の者が供先を割つて通拔けるやうなことの無いやうに、といふところから、あゝいふ形が起つたのである。その形が目立つので、時代が時代だけに、さういふ强がつた樣子をするものを好む。『むかし〳〵物語』にも『大身小身の歷々に奴有、下々にても中小姓歩行若黨中間に迄奴有』と書いてあります。これは元來中小姓、歩行、若黨、中間などといふものに奴があつたので、その行動が羨ましくつて太平で腕ッ節を持扱つてゐた大身小身の御歷々が眞似をしたのである。『其時分浪人町人にも若き利發器量ある者、浦山敷おもひ町奴などゝて有』といふ事も書いてあるが、それがその時代の新しい事だつたのだから、それを眞似る者が武士以外にも出來て來たのであります。といつても全くの土民がさういふ事も出來ないから、武士の筋目の者がさういふ眞似をする。これは昔戀しいからでもありましたらう。『吉原徒然草』などを見ると、『町奴の武士のまねしたる』と云つ

てゐる。これで町奴といふものがどんなものかといふこともわかるし、男達といふのが誰の事かといふこともわかる。男を立てるといふのは、武士を立てるといふのと同じ事なので、根からの町人や百姓の云ふべき言葉でもなし、思ふべき事でもなかつた。

有徳人の若い悴

それから奴、武家の奉公人が派手々々しい動作をしたとは、伊達政宗も『よき人が歩若黨の眞似をする倒なり』と云つて居るし、池田光政もこれと同じ事を云つて居るのでもわかりませう。この奴をはじめとして、身分に違ひはありますが、武家に屬する方の者は、さうして威張つて歩けば錢も餘計入るわけだけれども、その錢の出所がある。町奴の方は錢の出所は無いが、たゞ威張つて歩いたものでもない。寛文版の『子孫鑑』を見ると、『世中に闕人、男だてといふ異名あり、かく人と云は博奕のみ業としてけり、おとこだてといふはうとく人のわかき子共、其外色々我まゝもの共と見えたり』といふことが書いてある。續五元集(天和三年)にも『膈人出レ家露夕邊なり』といふ句がある、それを延寶版の吉原失墜には『かく人、ばくちうちなり、かくのわづらいは、のめばはくやまひなり、ばくちうちもかちて、またまくるゆへにかく人といふ』と說明してゐる、膈の病、飲食の持たない病氣、皆吐逆して了ふ、其の病症に喩へて博徒の異名にしたといふのだ、博徒は當然俠客であると思ふのも隨分古いことなのが是で知れる、博徒は博徒、俠客は俠客だ、其の總べてを俠客と見るのも間違なり、博徒と見るのも間違である。だが有徳人の若い息子が男立をするといふのは面白い、若い息子どころか御藏前の札差共の中には、白髮あたまで男立がつて大滑稽を演じたのさへある。此の『子孫鑑』は後世からいふ男達を二つ分にしたので、博奕を打つ方を闕人、錢のある人間共の若いのが氣張つて歩くの

を男達、といふ風に見てゐる。これは何れにも錢が入る、錢の出ッ端のある者でなければならない、といふことがわかる。五代將軍の頃の事を書いた『御當代記』には、『今町にて男だてといふもの有、かくじんとも又とをりものとも、ばくち打ともいふ、みな同じ類のもの也』と書いてある。どつち道餘計な錢の遣へる者でなければいけなかつたのであります。

併し此等の者共といふものは、とかくに世の中を騷がせて歩く者、身持も不埒千萬な者でありましたから、寛文四年三月に旗本奴の處分があり、その方はだん〳〵無くなつて行くやうになりましたし、町奴の方も承應三年十一月と、貞享三年九月との二度に二百五十人近い者を處分しました。この方は遠島になつたのですが、これが丁度界目になつてだん〳〵減つて參りました。けれども世の流行といふものは恐ろしいもので、遊女にまで奴風といふものがあつて、それから後になりましても、華魁は張臂でないと見榮がしないから、張臂はオイランの極りになつて殘つて居りました。芝居へもその模樣が殘りまして、山の手風と殿中風といふ旗本奴の姿がある。この山の手風の方の行裝は、芝居でする十八番の中の鞘當、あの不破の方が山の手風、名護屋の方の行裝が殿中風といふ旗本奴の姿なのであります。

家光將軍の物數寄

この奴風といふものが、寛永度に於て俄に大名や旗本にまで及んだといふことは、大名や旗本が自分の家の輕い奉公人の活潑輕快な姿が羨ましかつた爲ではありますけれども、それを一層刺激したのは家光將軍の驕奢でありました。家光將軍の御小姓に高嶋左近といふ者と、御歩行頭板倉市正といふ者とありましたが、この兩人は非常に縹緻のいゝ少年で、何方も勇氣に充ちた者でありました。殊になか〳〵利口な者でありましたから、これが三代將軍の御意に叶つ

て、ひどく寵愛された。その寵愛を誇つて伊達衣裳を好み、三尺有餘の長刀をさし、歩行若黨も男振を吟味して立派に出立たせ、それを召連れて自分も一緒に大道狹しと歩いた。殊に喧嘩が好で、行く先々で喧嘩をする。喧嘩をして强みを見せ、その勇氣に誇る。この時分に高嶋左近の事を、江戸の者が『奴左近』と云ひました。御小姓をつとめるのですから、これは旗本衆です。身分のある士でありながら、喧嘩好だといふことで、處々で喧嘩をして人を斬りました。それ故に三代將軍は頗る寵愛されたのでありましたが、承應三年四月十日に切腹を命じて居ります。生年十九歳で、喧嘩の爲に早く死んでしまつた。かういふやうな事が、大名や旗本に奴といふ派手な、もの〳〵しい流行を拵へ出すのに力があつたと思はれます。下々の奴までが着ました伊達衣裳といふのは躍衣裳なのです。家光將軍は男色がお好きで、御小姓衆の躍が何よりの樂みなのだつた、躍の御上覽も繁々ありました。諸大名も競つて男振りのいい小姓を抱へ、華美壯麗な衣裳を着せて躍らせましたので、それが當時の流行になりました。當時の躍は男色藝術なのです、將軍が躍上覽の日と云へば老中以下伊達政宗をはじめ諸大名までも紅裏染小袖で登城する、或時大目付の井上筑後守が例の麻上下で出仕いたしました。家光將軍が忽井上筑後を呼び付けて、其方の衣裳は兼て觸れておいたのとは違ふ、何と心得て式服で登城いたしたと尋ねられました、さうすると外樣への御觸は、私共役人への御觸でないやうに心得べきものと存じをりますると御返答申上げました、その時御機嫌が惡く、其方は亂氣したのでないかとさへ云はれたが、筑後は私共は少も亂氣は仕りません、唯だ老中共が亂氣仕りをるやと存じますると言上した、將軍の氣色は愈々惡く、其のまゝ御立なされて了つた。眞面目な顏をした老中抔が、男色にめでゝ寵愛されてゐる御小姓に似合ふ躍衣裳を着て出仕するのは、全く本氣の沙汰ではない、流石家光將軍も御手打になる覺悟で諫めた井上筑後の諫めに感悟した

のか、後には躍を見物しないやうになつた、それでも男色も躍も伊達衣裳も其後五十年内外を持續した。

奇拔な小田原風

それから民間の方を眺めて參りますと、町奴の前に『かぶき者』といふものがありました。これは慶長度のもので、『伊達者』ともいひましたが、『小田原風』とも申しました。異風な樣體をして歩くもので、この『かぶき者』の方で最も名高いのが大鳥逸平であります。この名前が時代と共に移つて行きまして、寛永には奴、明暦には丹前、萬治寛文には六方といつて居ります。この中には民間からのもあり、武士からのもありますが、この異風な樣體に就て、寛永十五年七月と、寛文十年十月と、正德二年七月と、三度取締の法令が出てゐる。此の頃の武士は、三尺有餘の大刀、二尺有餘の大脇差をさして歩いて居りました。

一體二尺以上を刀、一尺九寸までを大脇差、一尺七寸までを中脇差、九寸九分までを小脇差と申して居つたのでありますが、この刀脇差に就ても、慶安五年二月と、正保五年二月とに法令が出まして、長刀や大脇差を禁じて居ります。寛文八年になりましては、町人に刀をさすことを禁じ、さうすると一本さす町人等が刀はさせなくても、脇差の長いのをさします。天和三年には脇差をさすことも禁じてゐる。『稻妻や一尺八寸そりやぬいた』といふ句がありますが、これは脇差といはずに脇差といふことがわかる句であります。卽ち大脇差と中脇差との間の寸法で、これは町人どもが拔いたのであるといふこともわかります。又後來長脇差といふのも、この寸法で考へられるわけで、中脇差以上のやつをさして居つたのであります。

それですから『異本洞房語園』に、新吉原の和泉風呂の久助といふ者が、他人の腰の物と紛れないやうにといつて、紫竹の太いので長さ一尺八寸許りの煙管を拵へて、常に腰にさして居つた、といふことが書いてある。これなども寛文八年の禁令によつて町人が刀がさせない。當時の吉原は素刃拔の喧嘩が隨分ありましたから、それに對抗する爲に、かういふ馬鹿々々しい煙管を持つてゐたものと考へられます。材木屋などは燒印の柄を長くして腰にさしたし、米問屋などは米さしを長く拵へて腰にさして居つた。大坂の事を書いたものではありますが、『武道張合大鑑』などには『懷中劒』と名づけて、尺八をさし込』とか、『米さしといふ一尺八寸の竹のさきを鑓の如く尖らし』とかいふことが書いてある。米さしなどといふものは、米俵に突刺して見本米を取る時に使ふものですから、そんな長いものは入らないのに、殊更に拵へたと見えます。其の方法は中脇差よりも長いのが注意される。又『きせるの煙管二尺七寸にして外へ出る時は吸口火皿を引きて上下に太き筒を入て杖にして行さきにての樂しみ：：後には三尺四尺一間二間つぎ』といふやうなことも、二尺七寸といふ寸法は、刀法度から來てゐるのです、長い煙管を大刀に擬へ、米さしを脇差に見立てたので、此等は皆喧嘩道具であつて、刀をさしてはいけないといふ事にきまりましたから、かういふことになつたので、江戸も大坂も同じ事だつたやうであります。米屋などには主人にも隨分荒

吉原袖鑑の挿畫

見立繪の男達

つぽいやつがあつた。謔か本當かわからないが、松前五郎兵衛――例の彦左衛門の話に出て來る米屋です――が武藝がすぐれてゐた爲に、旗本の憎しみを受けたなどといふ話も、かういふところから出てゐる話でせう。大坂でいふ仲仕、江戸では小揚といひます、米を運ぶ人夫にも、大分腕ッ節の強いやつがあつた。寛文版の『吉原袖鏡』などを見ると、素見客の腰に妙なものをさしてゐる、それが例の米さしです。英一蝶の畫いた深川八幡の圖にも、米河岸の若い者が腰に米さしをさしてゐる。遊びに出るにも米さしをさしてゐたことがわかります。これは寛文八年に、町人の刀脇差を一切禁じた後の事でありまして、芝居の助六や雁金五人男が尺八をさしてゐるのも、喧嘩の道具であつたことが知れます。

材木屋は寛文に轉業

けれども米河岸の方の話は、いくらか後へ殘つて居りますが、材木屋の方の話は江戸では早く無くなつて居ります。江戸では白木屋が材木屋から呉服屋に轉業しました寛文二年、あの頃から材木屋の方が儲が少いので、大概呉服屋に變つてしまひましたから、從つて材木屋が腰に燒印をさして歩いた方の話は少い。米さしを腰にさした方の話がいくらか殘つてゐて、民間に元氣のいゝ、鼻ッ張の強いところを見せる。いづれにも金が不時に儲かる、その景氣によつて伸び縮みするものでありますから、種も蒔かずに生えては來ない。江戸のやうな土地柄では、さういふ人氣の荒いやうな事柄が出て來さうなところだとは云ひながらも、やはり錢の餘計儲かるといふ事、黄白の力が加はらなければ出て來ない。氣の毒ながら當り前の人間の元氣や勇氣といふものは、鼻ッ張や娑婆ッ氣には限らない、何時でも經濟關係に支配されることが多いのは、考へて見るまでもない事だと思ひます。

伊勢町小田原町

それから後のところになりますと、江戸の民間の元氣のいゝ手合は、伊勢町小田原町、米河岸、魚河岸、この連中が目立ちました。河岸八町と申しますと本船町が三丁、伊勢町が二丁、小網町、小船町、堀江町で八町になるので、こゝに本米問屋といふ下り米を專ら扱ふ商店、地廻り米の問屋といふのもありまして、大體二分れになつて商賣をして居りました。奥州米が寛永九年から江戸へ入つて來るやうになりまして、一時は江戸の米は三分までも奥州米であるといはれたほどでありましたが、だん〳〵後になりますと、地元と江戸の相場の開きが少くなつて來たのみならず、元祿の頃から大廻しの米が多くなつて、大坂の方へ行つてしまふやうになつた。かういふことで米河岸の景氣は大分下火になり、たまに入つて來る奥州米も、大坂商人が藏元になつて、その手を潛つ

て入つて來るやうになりましたので、米河岸の繁昌といふものも、元祿以前のやうに行かなくなつてしまひました。

魚河岸の方は申すまでもありませんが、本小田原町、本船町、安針町、長濱町、室町に亙つて居りまして、そのうち南通の方が魚河岸であります。まだこの外に字を申せば、芝河岸、地引河岸、高間河岸、木更津河岸、蜆河岸などといふのもあります。魚河岸は寛永度からこの邊のところにありましたので、だん〳〵にそれがひろがつて、五町に亙るほどの大きなものになつたのであります。寛永の頃までは、魚屋が大名の御用を勤めるのを面倒臭がりまして、勤めないのが一般の姿であり、掛賣といふこともありませんでしたが、天和頃から大小名ともに御馳走澤山になり、魚の御用もだん〳〵殖えて參りまして、自然貸賣をするやうになつた。この貸賣が一月送りの勘定で、魚屋が物書きを置かなければならないやうになり、金高も大きくなつたので、魚問屋の羽振がよく

なりました。さうなつて參りますと諸大名への出入を魚屋の方から望むやうになりましたが、その頃から諸大名の拂が惡くなつて來た。話は違ひますが、この諸大名の拂が惡くなつたといふ事、これは『永代藏』などにも書いてありますが、江戸へ出てゐる京店が掛が取れなくつて困る、どうにも始末がつかぬところから、三井九郎右衞門が現金掛値なしの商賣を始めて大評判を取つた。諸大名の拂の惡かつたことはこれでもわかりますが、その拂の惡い爲に早いところで破產した者には、後に神道家として知られた吉川惟足の如き人物があります。彼は尼ヶ崎屋五郎右衞門といつて立派な魚問屋でありましたが、諸大名の御用を勤めて、その掛が寄らぬ爲に逼塞して鎌倉へ引込み、それから神道家に化けたのであります。

それから新場といふものがあります。これは延寶年中に相模の濱方と申合つて、京都商人が資本を出し、それで本材木町の方へ分れたのが新場なのです。

當時は幕府の御肴御用を魚河岸で二十日勤めれば、新場で十日勤めるといふ風にして居りました。この新場に中村太郎右衞門といふ者がありまして、これが御次肴の値段を平均三割半引けで、一手に引受けるやうになりました。ところがこの金がうまく拂つて貰へないので、その滯りの爲にこの家が潰れてしまひまして、それから後は入札といふことになつた。五年なり七年なり一定値段で納めることにして、入札できめるのですが、その切替へる度に安くなるので中村がきめた定値段から見ると、わづかの間に六七割も納値段が安くなる。とてもこれでは勤めきれない、といふことになりましたから、寛延二年から御膳肴も御次肴も、小船町と四日市の町役にすることになつてしまつた。諸大名の方は幕府とは違ひますから、中村のきめた定値段で享保以後も納めて居りました。この方は利益がある筈だけれども、御拂が惡いので、やつぱり利益が取れない。

諸侯の活鯛惣献上

家宣將軍が正德元年四月に前將軍の喪を濟まして、御精進上りといふので諸大名が競つて活鯛の總獻上をした。何しろ數が多い上に獻上の日がきまつてゐる。四月といふと鯛の最も拂底な時で、その時の活鯛問屋は西宮甚右衞門、筏屋與二兵衞、大和屋長兵衞の三軒でありましたが、その中でも大和屋だけが持荷があつて、他の二軒には持荷が無い、それが爲に大和屋の獨占といふわけになつて、一日に現金一萬兩の利益があつたと申すことであります。この時松平薩摩守から獻上しましたのは、二尺七寸の鯛が三枚揃で百八十兩、尺がそれより少し短いものでも、三枚揃となると百七十兩から百三十兩位した。ずつと詰つた尺四寸位のものでも、三枚揃で九十兩位のものだつたさうです。松平越中守のは尺三寸の三枚揃でありましたが、それが七十五兩したといひます。さういふ風に鯛が拂底で高うございましたから、一尺一寸以上のもので一枚十五兩より安いものは無かつた。まるでこの時の樣子を見ますと、明曆以降のところで檜の相場を一寸何程で立てたより、もつと手づよい相場でありました。この時の活鯛の賣れ方は前代未聞と申すべきほどの勢だつたのであります。『永代藏』に紀州大湊の天狗源内といふ漁師が、鯛を生きたまゝ、何處までも送る法を考へついて、大金持になつたといふ話があるのも、かうした景氣の時だからでありませう。

享保には路面乾く

小田原町の最も景氣がよかつたのは、五代將軍、六代將軍の時でありました。或年の正月に伊勢海老がきれて無い。元日の飾にどうしてもなければならんといふので、江戸の町人が一匹五兩出して買つた。西鶴がこの話を『永代藏』

に書いて、『江戸はわきて町の人心不敵なる所、後日の分別せぬ所ぞかし』と評して居りますが、さうした調子だから魚河岸の景氣が非常によかつたのであります。然るに吉宗將軍が本家を相續して、その將軍宣下の御祝に又活鯛獻上があるだらうといふので、大名の總獻上を目當に魚河岸が大に張込んでゐると、さすがに儉約を名物とした人だけあつて、活鯛獻上無用、干鯛を獻上すれば宜しい、といふことになつた。すつかり目がけてゐた活鯛獻上の目算が外れたのだから堪らない。それから小田原町は衰微に向つたのだといひます。何しろ儉約を名物の人が將軍になつたのですから、幕府ばかりではない、諸大名の御肴御用も減つて來る。享保の不景氣はなか〳〵ひどかつたので、町々の需用も減る。小田原町は寛永以來草履を穿いて入れない位であつたのが、享保以來は商が少いので路面が乾いてゐるから、草履穿で歩けるやうになつたといひます。

九間一丸を躍船

かういふ變化を控へて、伊勢町の方は盛であつたものがずんと衰へかけた。小田原町は愈〳〵景氣立つて來た際――丁度これは元祿以降、五代將軍から六代將軍に跨いだ時代の話ですから、伊勢町と小田原町とは夕日と朝日といふ按配であり、自然その間が面白くなかつた。その面白くなかつた樣子は、『五元集』の鷄合に、

伊勢町小田原町鷄犬ともに中あしく、木戸を限つて取合なし、童僕の心も亦しかり、たま〳〵獨游びをすれば、惣〳〵のなぶり者とす、年頃日頃の意趣を含て、呉越の名主を煩はしめたり。

と書いてあります。その軋り合つて居ります當時、種彦の考證したものゝ中に踊船の事が書いてありますが、小田原町の踊船が出る日は船の貸賃が倍增した

といふことです。踊船といふのは例の屋形船で、九間一丸といふのは幅三間の長さ十一間、間數にして十間あるから九間一丸といふ、この船を踊船にして、出入口へ緞帳をかけて出る。八間一丸といふのは幅三間の長さ十間、八間一ですから九間あるわけです。この方を樂屋にして、二船の間に厚い板を渡して舞臺へ通つて、踊を躍つたり獨狂言をしたりする。キリになると淺草の大茶屋まで引上げて、二ノ膳付の料理が出る。食事が濟むと又出かけて躍る、といつたやうな有樣でありました。この踊船の事は京傳の『骨董集』蜀山の『半日閑話』などにも出て居ります。併し踊船は小田原町に限つたものではない。伊勢町の方でも出してゐます。『松の葉』に『あづまをどり』といふ唄がある。その文句は、

朝の六ッから、ずんど出かけた、ずんずと踏み出す八文字、鬢附とろりと人柄で、伊勢町舟町の伊達姿、酒屋の娘、店のひまよりチラと見た、見染めた晩に逢ふぞや、語ろぞや、差足そろ〳〵潛りをチックラ〳〵クラチックラばつたり、くら闇がり、チックラばつたり、くら〳〵がり、くら〳〵くらがりのくらくとも、あけてお待ちやれ、遲くも〳〵月の出るまで、

といふのでありますが、『伊勢町舟町の伊達姿』とあるのを見ると、伊勢町の方も相當張込んだものといふことがわかります。

伊左衛門とは違ふよ

さういふ時分でありますから、伊勢町にもいろ〳〵贅澤な人もあり、威張つた人もあつた。伊勢町に月夜の利左衛門といふ大臣、大さかづきといふ諢名の大臣、相模屋といふ家の主人で、身上をぶつ潰してしまふまで伊達をやつた人などがある。そのうちに一つ、月夜の利左衛門といふ人の話が殘つて居ります。これは隨分に修飾した話であるかも知れませんが、江戸の昔の婆婆ッ氣の強い金持の樣子を十分に見せてゐる。利左衛門が遣ひ果して伊勢町を立退きまして

後、谷中邊に居つて毎日金魚の餌の孑孑を掬つて歩く。一日二十五文乃至三十文、やう〳〵取れるか取れないといふはかない暮しであります。それを昔の遊び仲間が見つけ出して、どうも友達を零落さして默つて見ちやゐられない、今までお前さんの居所がわからなかつたから、どうにもならなかつたが、今見つけたのを幸、何とか暮しの立つやうな世話をしよう、と云つた。それに對して月夜の利左衞門は、昔の惡所友達の世話になつて、其の日〳〵を送つてゐるといはれるのは殘念だから、お世話になりたくない、併し久しぶりで逢つたものだから、茶碗酒でも飲んで別れようぢやないか、といふので、その二十五文か三十文しか無い錢を出して、撮み錢の酒盛をした後、友達等がせめて今日の住ひを見て置きたい、といつてついて行つた。家にはお父さんが錢を持つて來てくれるといつて子供が待つてゐる。利左衞門はその錢を茶碗酒にしてしまつたのですから、もう一文も無い。それを見かねて友達が懷にある金をはたいて、內證で置いて立去つた。ところが利左衞門はそれを見つけると、友達のあとを追駈けて行つて返した。受取らぬといつたら、そこに投棄てたまゝ、歸つてしまつた。とてもあゝいふ風では金は受付けまいからといふので、今度は品物にして、利左衞門の女房に贈らうと思つて、二度目に谷中へ行つて見ると、もう在鄕へ引越してしまつてゐる、行方が全く知れなくなつた、といふ話であります。この邊のところでも、上方仕立の大臣で『紙子ざはりが荒い〳〵』といふ伊左衞門なんぞとは、まるで行き方が違つて居ります。

又小田原町の方で見ても、なか〳〵元氣のいゝのが澤山ゐる。殊に小多喜組といふ男達の頭分であつた小多喜權兵衞といふ人などは、身上も相當な商人でありましたが、これが吉原へ行つて、當時の俠客の鐘彌左衞門と喧嘩をした斬つ張つの喧嘩になりましたが、土地の者や遊女等にとめられて和談をすることになつた。名主も女郎屋の亭主も喜びまして、彌左衞門も權兵衞も馴染の女

郎が玉屋にあるものですから、玉屋の亭主も出て來て、私どもの云ふことを聞いて喧嘩をしないで下すつたから、今日は御禮にお二人ともゆつくり遊んでくれろ、と云つた。それならさうしようが、一つお前の家の遊女を總仕舞にして遊ばう、といつたので、亭主も弱つて、今日は私の方から無事祝だといつて御招き申したのだから、さうして貰つては困る、さういふ心配なしに遊んで行つて貰ひたい、といつて頼んだ。二人も納得してその日は遊んで歸りましたが、その後、何方が先、何方が後といふことなしに、この二人がやつて來まして、他の客を一切斷つて遊女ども一同を遊ばせようといふ申合をした。喧嘩後一兩日を隔てゝ三日三晩といふもの、遊女を揚げづめにして大遊びをしたといふことです。かういふ風に、喧嘩もすれば派手な事もするといふやうな、氣前のいゝ、元氣のいゝ人間が大分居りました。

さてそれから後、だん〳〵に伊勢町がおとなしくなる。小田原町の方も伊勢町よりはいくらかいゝけれども、大體の景氣はいゝわけではない。併しその方にいろ〳〵な人物が出て來たところを見ますと、金の廻り工合は小田原町の方がよかつたらしい。

喧嘩入用の積立

小田原町には小多喜權兵衞が出たのみならず、さういつた人物が他にも二三あつたやうですが、さういふ景氣に卷込まれて、商内の樣子は大分變つて參りましても、元氣のいゝ人間は絶えなかつた樣子であります。『中古戲場說』などを見ると、延享度になりましても、芝居の顏見世などにはつみ物連中――大坂でいふ手打連中のことですが、隨分元氣な手合が來て騷いだもので、小田原町、新場、材木町、四日市などの若い者は、死生知らずのあぶれ者といつて、芝居の者が恐がつた位である、といふことが書いてある。かうした元氣のいゝ者ど

もは盛り場へ出て、大勢人の集つたところで力んで見せる。大勢人の集つた場所といへば、どうしても惡所、卽ち芝居町とか、遊女町とかいふところがよろしい。魚河岸の連中は吉原の方よりも芝居の方に集るのが多く、何時も芝居の方で景氣を見せてゐる。小田原町や新場の若い連中以外の者も、同じ意味で町々の祭禮、開帳、花見、月見、かういふ場所で幅を利かしてあばれる。米河岸の方は米を商ふだけに商内高も多うございましたが、元祿以前のやうに相場違ひによる利益は少くなつて參りました。何に致しても米の事でありますから、一體に大きな取引ではありましても、以前のやうに飛び放れた相場違ひの儲がだん〳〵少くなつて來る。殊に身上の大きい者が居りますだけに、享保度になつてぐつと締つて參りましたから、大分振合も變つて來たのであります。魚河岸の方も享保以來景氣が惡うございますが、この頃で見ますと、小田原町は房總二箇國、もちつと遠海のものを扱ひます。新場は豆相二箇國と近海のものを扱ひます。だん〳〵民間の食物がよくなつて參りまして、需要が增加して來るに從つて、近海物の相場が大分高くなつて來る。魚屋の方は米屋のやうな大身代はありません。それとは比較にならぬ小さい身上ですが、物が物だけに格外な動き方をして、午前と午後でも非常な開きがある。昨日と今日といへば又著しい隔りが出來る。商内はその日きりでテキパキ片がついて、問屋から仲買、仲買から棒手振と、順々に品物を捌いて來ますが、問屋としても大分濱の氣分が移つて來るところがある。さあ大漁だといへば、一際景氣立つて來ます。衰へて來たとは申しても、さういふ有樣でありますから、手締をするといふやうなことはありません。何にしても鯛一匹で半日の間に二兩も三兩も開きがある、といふやうな事のある場所でありますから、さういふ風にして儲ける錢が、向鉢卷で飛上つたやうな氣持の人達を躍らせるにはごくいゝ。何となく氣が引立つてゐる。ぐづ〳〵してゐれば魚が腐つたやうに見える。元氣よくすると生き

てゐるやうに見えるといふ氣持がある。魚河岸では江戸の末まで、喧嘩の費用を積立てゝ置くといふ噂をされたのも、商賣柄、場所柄まことによく似合つた話だと思ふ。

新場の初鰹の景氣

この魚屋の中で一番目立つのが初鰹、河岸の景氣は初鰹だけではありません。夕河岸の鰺、もつと安いところで行けば夕河岸の鰯、さういふものもなか〳〵景氣よく見えたし、利益もあつた。殊に鰺は『江戸名物鹿子』の中にも、芝浦の『中ぶくら』といつて名物に數へてゐます。『續江戸砂子』にも、

江戸前鰺、中ぶくらと云、隨一の名産也、惣じて鯛平目にかぎらず、江戸前にて漁るを前の魚と稱して諸魚共に佳品也。

と書いてある。この『江戸前』といふ言葉は鰺から來てゐるので、『武玉川』にも

江戸前賣の江戸と云ふ面

といふのがある。この『江戸前賣』といふのが、『江戸前』といふ言葉の早いものゝやうに思はれます。それがやがて鰻になつて、江戸前鰻といつて江戸の名物になつてゐる。併しこれは江戸前で捕れるんぢやない。千住や尾久の方で捕れるのを江戸前鰻といつてゐる。そんなら地廻り鰻といひさうなものだが、江戸前鰻で濟してゐる。その外から來るのは旅鰻といふ、江戸前といふことを氣の利いたことのやうに思つてゐるが、さうぢやない、芝浦で捕れたといふことなのです。是も實は芝浦で捕れはしないが、それを扱ふのが新場なので、新場といふものゝ景氣は江戸前の魚を商ふといふことが何よりであつた。

さて魚屋の一番際立つた賣物は初鰹で、これも豆相の海から來る。芭蕉の句にも、

鎌倉を生て出けん初鰹

なんていふわけで、これも新場で扱ふものだ。初鰹は四月の初がしゆんで、先づ大概一匹が、嘉永度でも二三兩はしたらしうございます。それも少し安い時は一分二朱か二分位したらしい。安永度にもやつぱり一分位、景氣がよかつただけに文化度にはちつと高かつたやうです。文化十年の『かまはぬ盡』に、

高い物の親玉、初松魚、五兩してもかまはぬ、

と書いてある。まさか五兩もしなかつたらうと思ふが、慥に安永度よりも高く、嘉永度よりも高かつたに相違無い。嘉永以後の事としますと、目の下一尺四五寸位のものなら一分、御納屋から柳營へ納める定値段が二百五十文位だつた。これが新場の夜鰹といふので、なか〳〵名高い。それから昔は舟へつけて持つて來るのと、馬へつけて持つて來るのと、競爭して新場へ運ばれた。其角の句に、

馬舟とわかる鰹やけいば組　其角

とあるのはこの事を云つたのです。又『小利口にうつてつけたり鰹うり』なんていふ句もある。享保度の前句附に『初鰹一兩迄は買氣なり』といふのもある。何にしても持つて來るのから、棒手が賣廻るのまで景氣がいゝ。一九の『六阿彌陀詣』の中に、『ハテ袋物商賣や初松魚うる手合は、金持を相手にやアせぬ』といふことが書いてありますが、袋物だとか、初鰹だとかいふものを買ふのは金持ぢやない、貧乏人が氣張つて買ふものと見えた。大坂町奉行を勤めた久須美祐明の書いたものゝ中に、『初鰹袷を殺す毒魚かな』といふ句を褒めて、よく江戸の人の氣象を云現してゐると思ふ、袷を賣飛ばして初鰹を買ふなんていふ氣前は、大坂の者から見れば、明日の暮しをどうするかわからずに、そんな事をするのはうつけ者だといふことになつて、とても相手になれぬものだと考へる、けれどもさういふ心持のあるのが江戸の人の姿で、まことにいゝ心持のものである、然るに近頃では風俗も人情も衰へたのか、初鰹の價を論ぜずに買つ

て食ふ、といふやうな事が少くなつた、風俗も人氣も年と共に衰へるのかと思ふと、何だか心細くなる、といふことが書いてあります。これは安政度に書いたものですが、鰹によつて江戸の人が無茶な事をするといふことを、御家人から經上つて、かなり苦勞した筈の久須美佐渡守すら取違へてゐるやうに思ふ。何にしても江戸の者が後先構はぬ暮し向をするといふのは、久しく續いた事柄でありました。

北條氏綱が擔いだ

一體江戸の者が鰹を喜ぶといふことは、今日の話にすれば出て來ない事だ。自由自在にどんなものでも持つて來られる今日としては、鰹よりもつとうまいものがある。大昔の關東でも春は鯛、秋は鱸を肴としてゐたのです。然るに天文六年、北條氏綱の軍船の中へ鰹が飛込んだ。それを勝負にかつうをとして喜んだので、それ以後戰場門出の酒肴は鰹に限るやうにきめてしまつた。これも早いのを尙ぶ。豆州、相州、房州で釣上げる初鰹を賞翫する。そのもとはといへば、小田原の北條氏が緣起を擔いだことから起つてゐる。それともう一つは、江戸近いところで生のいゝ肴を食ふことが困難であつて、そこで得られるものはといへば鰹などであるから、その邊からも賞翫することになる。もとが戰爭に勝つといふ緣起から出たものだから、今度は喧嘩に勝つ、相場に勝つといつたやうな心持で、魚問屋や肴賣が喜ぶ。そこでそれが江戸ッ子の何よりの食物となつたのでありますが、その實鰹などはそれほどうまいものでもない。けれども一度景氣がついて見ると妙なもので、初鰹の賣行によつて江戸が衰へた、年をとつたといつて歎息するやうなことにもなる。例の『松魚賣』の文句、

眼に青葉山時鳥、てッぺんかけて、松魚〳〵と賣聲もいさみ肌なる中ッ腹、
五十五貫も何のその、河岸の相場は半分でもまけぬ江戸ッ兒、水道の水に

洗ひあげたるいけだての生ていでもの、店先の算盤つくならよしなんし、ぶりばんどうさん、そんなその鉢巻させるじやごんしない、しらのきをひの兄さんを、見損なつたか闇雲に、高くとまつた御堂の烏、見ゐも飾も瓢箪も、ねぎつちやいけないさげ錢で、これでも晩にやお客さん、ひやかし數の子の聲がすりや、長屋のあねごが飛で出る、てふ〳〵かんざし三ッ大に打替させたぐいきまり、好たきおひじやないかいな、なんの男百貫、精出せそこだぞ、商大事、得意旦那は八百八町、八千八聲時鳥、初といふ字をいさみにて、松魚〳〵と走り行く。

といふのでも、踊に仕立てた文句でありますから、鰹を賣つて歩く人間を大そう美しく見てゐる、美化されてゐる。それより前にも、富本の文句に『家橘に似たる擔ひ賣、そのとりなりも拍子よく、氣轉も菊の上手者、打連れたちてあゆみくる』なんていふのがある。棒手振なんていふものは、そんな手綺麗なものでなく、綺麗事でもないのに、それを馬鹿に綺麗事にしてゐる。この心持からいへば見立繪が出て來る筈なので、見立繪といふのは無論役者です。役者の顏や役者の身體を持込む。手許にある弘化度のもので、三番物の『勇の壽』といふ、纏持を中心にしたものがあります。一枚繪の方では『勇商人』といふ名がついてゐて、水菓子賣、俵賣、絲つり人形賣、稗蒔賣、葛餅賣、葱賣、水賣、鮨賣、鰹賣、五月人形賣、讀賣賣なんていふものを畫いたのがある。此等はいづれも實物との距離には無貪著で、如何にも綺麗に心持よく畫き出されてゐる。といふのは前にも云つたやうに、江戸ッ子といふものが見物されてゐるのである。見物されて喝采される。その喝采につれて躍つてゐるやうなものなのであります。それは江戸の市民が取卷いて見るばかりでなく、武士の或階級からも眺めてゐる。芝居の見物階級といふことを前に云つたが、それは又江戸ッ子を見物する階級でもある。見るものといへば何よりも芝居であり、その芝居

といふものが、江戸といふ大都會の人氣を十二分に牽付けてゐるものであつた。その芝居を見る心持、舞臺の上を眺める氣分になつてゐるのだから、芝居に根を張つてゐる俗曲中に取入れるやうになる。又芝居の所作事になる踊といふものに仕立てる。それから見立繪、此等のものといふものは、いづれも舞臺の上で眺めなければならないものでありまして、その眺めたい氣持をそれ以上に引上げたものだといふこともわかる。見立繪といふものは存外輕く見ることの出來ない、江戸市民の心持をよく出してゐるものと思はれます。

神田祭の文句を見よ

さてそれほどに見物されてゐる江戸ッ子が景氣づいて來る。昔旗本奴が盛であつた時分に、あの旗本奴の中でも喧嘩好で名高い水野十郎左衞門の父、備後福山十萬石の水野日向守勝成の三男で、出雲守成貞といふ人がありました。

この人は二代將軍秀忠の御小姓づとめをして、三千石貰つてゐた立派な武士です。現在の身柄といひ、素性といひ、水野といへば德川の親戚筋でもありますから申分が無い。その殿樣である成貞が、頭は絲鬢、鎖帷子の著込、棕櫚欄の大小をさし、著物を短く著て脛が五六寸も出てゐる、といふ當時の奴風で歩いてゐる。時のはやりは恐ろしいもので、隨分變な姿のやうに考へられるのですが、それを物見から見てゐた蜂須賀阿波守至鎭の女が、その成貞の男振に惚込んで、無理にそこへ嫁に行つた。國守大名の女が三千名の旗本奴のところへ嫁に行く。隨分不釣合な話だけれども、さういふことがあつた。時勢がずつと下つて元文頃になりますと、旗本衆の妻や娘の家出をしたり、駈落をしたりする者が多くなつてゐる。大昔の寛永、正保の頃ですら、蜂須賀侯の女のやうな人があつたのですから、元文度に旗本衆の女達の樣子がさうなつたのは思ひ遣られる。行儀の面倒な武家でさへこんな風である。況して身柄のない民間の話に

なれば、もつと片づきのいゝのは知れた事です。今日もうたつてゐる『神田祭』あれは天保度に出來たものですが、あの中の文句は、市民の間の事柄ではあるけれども、見物階級から飛込んで來た女の事をうたつたものであります。

色のよくならこつちでも、常からぬしのあだな氣を、しつてゐながら女房に、成つてみたいのよくがでゝ、神や佛をたのまずに、義理もへちまのかはばをり、親分さんのお世話にて、わたりもつけてこれからは、世間かまはず人さんの、まへはゞからず引よせて、たのしむうちに又ほかへ、それからやみと口ぐせに、

芝居でする加賀鳶の梅吉の女房も、實家と不通になつて嫁に來てゐる。これなどは輕い武家の娘が飛込んだのである。『神田祭』の文句はまだ續いて居ります。

まつりのなア、はでな若いしゆが、いさみにいさみ、身なりをそろへて、やれはやせ、それはやせ、花だしてこまへ、けいごに行列、よんやさ、男だてじやのやれこれさ、たてひきじやのと、いふちやわたしを、こまらせる、

その風采が氣に入つて、相當な町人からこの無產階級へ飛込んで來る女がある。それからもつと進んだ、飛んだお孃さんがある。極端でもありませうし、數も少かつたに相違ありませんが、例の鼠小僧の芝居で、默阿彌は相方の松山にかういふことを云はせてゐる。

是もみんな其方のすき〳〵、お孃さんと云はれるのが、ちいさき時から、わたしは嫌ひ、油でかためた高髷よりも、つぶしの嶋田に結ひたい願ひ、御殿模樣の文字入りより、この字繫ぎの褞袍が著たく、御新造さんや奥さんと、いはれるよりも內のやつ、內の人がといひたさに、親を捨てゝ勘當受け、おまへの女房になつたわたし、

階級なんぞはまるで超越した行き方です。武士と町人の隔りはしつかりしてゐた、階級制度は幕府が衰へて來てもなか〳〵根強い、とさへ云はれてゐるのに、江戸ッ子の風采に惚込むやうな手合から云へば、そんな事は何でもなかつた。さうしてこの『勇み』といふものゝ中心は、いつともなく鳶の者に移つて來た。無論河岸の連中その他がありはあつたけれども、それは各〳〵一方に割據してゐるとでも云ひますか、江戸一面の姿から云へば、勇肌の江戸ッ子の中心は鳶の者だつたので、その周圍には職人、日用取、棒手振なんていふ連中がゐたに相違無いが、鳶の者は人數も多く、團體になつても居りましたから、自ら勢力を占めて來たのであります。

火消屋敷の殿様

自體江戸は火事が多く、その火事が人心に非常な影響を與へてゐて、その生活ぶりは火事の爲に動搖もすれば、傾斜をつけられても居りました。然もこの火事に對して、幕府は長い間に松平伊豆守と、吉宗將軍と、松平定信の他には多く思慮を費した人がなかつたと見えて、別に施設も加へてゐない。他の人は施設を加へるに及ばなかつたのかも知れないが、どうも火事といふことに就て心遣ひが少かつたやうに思はれる。幕府は火事といふことに就ては、戰時の豫習であるやうに考へた。特別に警備を要する出來事のやうに見てゐる。たゞ火事が人の生命財産に危害を加へるといふだけでなしに、政治的に考慮すべきものと考へてゐたのであります。火事といへば直に火付である。由井正雪が謀叛を企てた、それも放火を手段としてゐる。小さい泥坊、大きい泥坊が物取りをする爲に放火することは幾度もありましたが、政治的な意味のあるのは正雪の一件だけでありました。それですから町奉行の外に、火方盜賊改といふ役人も拵へてあつた。火消といへば町火消だけのやうに思はれてゐるけれども、早く

から大名火消といつて、諸侯のつとめる火消がありました。これは方角火消ともいひまして、場所が指定してある。大手、櫻田、二之丸、紅葉山、吹上上覽所、淺草の御藏、本所の御藏、增上寺、上野、聖堂、猿江の材木藏、殊に大手、櫻田は組になつて居りまして、大きな大名が一人に小さい大名が四人、といふことになつて居りました。これはその近所に火事が無くても、火事の場合にそこを固める役廻りをして居つたので、火事を政治的に考へて、警備する意味のものだつたのであります。この他に火事がひどく大きくなつて來た時は、臨時に幕府が諸大名の中に對して火消方を命ずる。これは固める意味ではない、火を消す方の意味のもので、奉書火消といつて、火事の大小によつて三人も四人も臨時の火消を命じることがあるのです。けれども大名火消は火を消すことよりも、その時のドサクサに乘じて異變が起つてはならないから、警備をする方の意味が多かつたやうであります。

その他にまだ定火消といふものがあつた。これは旗本の五七千石位取る、然も内福の旗本が選まれるので、勤めてゐれば損が行くのですから、金を遣はせる爲に命じるのです。十人火消ともいひまして、駿河臺、小川町、四谷御門内、八代洲河岸、御茶之水、麹町御門外、赤坂御門外、飯田町、市谷左内坂、溜池の十箇所に在つた。もとは八組のこともあり、十五組のこともありましたが、寶永元年以來十組になつたのです。この定火消といふものも、ずつと古いところでは大名の役目でありましたが、後には旗本の役廻りにきまりました。それだから火消屋敷の殿様といつてゐたものです。役料三百人扶持、與力六騎、同心三十人、それに中間、時の言葉で申せはガヱンといふ、これが二百人前後ついてゐる。これだけが一屋敷に居りました。このガヱンといふものは、何しろ素裸で火がゝりをする。町火消は刺子を著てゐるが、これは褌一つで火がゝりをするので、役屋敷の方では先陣といつてゐました。これが平常民家へ出

て來て、錢緡の强賣をして隨分困らせたものです。ガヱンは前の十屋敷に配備されて居りましたから、總人數から申せば千人も千五六百人もゐたのでせう。これが官設の消防隊です。

それから町火消、この町火消といふものは、享保三年十月頃、一町から駈付人足三十人づつ出せといふ命令があつた。その後十五人に減少されましたが、そこから出て來る人足は店人足で、素人だから働けない。これではいけないといふので、一町から一兩人、大きな町になつて四五人の鳶の者を出すやうに、といふことになつた。その時はじめて——といふのは享保三年十二月ですが、片假名付の組合が出來た。これで町火消といふものも、素人でない專門家が出て來るやうになつたのですが、享保十五年正月になつて、前には片假名付の組合であつたのを、平假名のいろは付にして之を小組といひ、その四十八組を十番組に割つて之を大組と云つた。これに屬する鳶者の數は、手近い安政の町鑑によると、九千七十九人あります。この大組の方の纏、大纏といふものは年番になつてゐまして、組合の町方のうちから順々に預ることになつてゐた。それから町奉行所の方では、與力が一人、火消人足改といふ役があつて、この方を擔當することになつて居りました。その時分各町々々に町入用といふものがありましたが、その入用の過半以上は火消の入用だつたさうです。龍吐水を用ゐることは享保に町火消が出來る時分からの事でありまして、最初は官給でありましたが、寛政三年から渡しきりで、修繕その他は町方でするやうになつたのであります。

消防の三番組織

一體この龍吐水を江戸で用ゐるやうになつたのは、京の火消の道具及組織といふものを、江戸で新に町火消を拵へる時分にうつしたのによつて起つたので、

それ以前は水で火を消すといふことよりも、家を敲き壊して燒草を無くして、火事を消すといふ方が主でありました。道具持といふものは、纒持を先にして、梯子、刺俣、釣瓶、大溜籠、擔籠なんていふものを持つて行きました。刺俣といふものは、大勢梯子に取付いて上る時分に、竹梯子がしなふといけないから、それを支へるのが役目なので、梯子一に對して刺俣二の必要があつた。長鳶、大鳶なんていふものも持つて行つたが、これも破壞の道具です。もとの火消の樣子がどんなものだつたかといふことは、定火消の組立を見るとよくわかる。定火消の方で見ると、先番が火がゝり、中番が水の手、後番が消し口に廻るやうになつてゐる。水の手である中番の方に、釣瓶だの、大溜籠だの、擔籠だのといふものがある。この釣瓶の方の役廻りはどういふのかといふと、井戸から水を汲むと、小さい籠へ入れて大溜籠のところまで運ぶ。それから今度は大溜籠から水を分けて、手繰にして梯子の下まで持つて行くのが長鳶の役、それを屋根の上へ持つて行くのが梯子と刺俣の役廻り、上から水を運んだ小さい籠を投げてよこす、それを取集めるのが梯子の役、といふ風になつてゐる。そこで水を運ぶのに最も便利なのが玄蕃桶、これは明和度に久留米の有馬さんが大名火消を勤めた時に考へ出したもので、有馬の家は代々玄蕃頭だから、あの桶を玄蕃桶といふやうになつたのです。龍吐水も持つて行かないことはない、後には定火消も持つて行つたやうですが、それよりも却つて龍吐水の無い支度になつてゐたことが、昔の火消の樣子を示すものである。町火消は龍吐水を持つて行くけれども、水を運ぶのに必要だから釣瓶や擔籠も持つて行く。それが後には玄蕃桶になつてしまつたのであります。

ガヱンと町鳶

天明度に書いた『夢語』の中にこんな事が書いてある。

火消役の人足ども、是前にいへる風來者のなる所にして、其以前は十組に附渡りにて、此頭する者有て、此申付を背けば所々の役場勤る事ならぬやうに有しとぞ、今も部屋頭などいふもの有て取鎮なせども、其元みな惡たれものゝ成の果なれば誠に俠者也、是能其取鎮役人を仰付られて嚴敷法を立、戒るやうにせば然るべし、或人曰さあらば此火消人足なく成るべし、答曰なくならば、幸也、今町人の抱の者は、みな〳〵身元慥成ものどもにて火消人足の如き宿なしにはあらず、かゝるものを遣ふやうに成べし。

それほど定火消の人足、卽ちガエンなるものゝ始末に困つたのであります。といつて褒められたから、町火消の方の人足は結構なものかといふと、これもあまり結構なものぢやない。江戸の末になりましても、仕事師と稱せられる鳶の者は、一日三百か三百五十位のもので、賃銀がごく安い。その他に早出とか居殘りとかいふので增錢がある位のものである。彼等は年中半纏、股引、草鞋といふ出立でありましたが、もう江戸の末頃になりますと、火事の外には草鞋は穿かずに麻裏草履を穿いてゐる。これが又なか〳〵荷厄介なもので、やつぱりキャンなやつが多くなつた。さうしてこれには町抱、店抱、半抱、本抱などといふきまりがありまして、各町々の消防隊に屬してゐる外に、出入と稱して方々の商家に係合があり、その方からも手當を受けてゐます。生活か保證されてゐるとでも云ひますか。だがそれほどまでにして貰つてゐても、彼等はなか〳〵よくない事をする。『世事見聞錄』の中に、近來火事の時に火を呼ぶといふ事をする。日頃面白くないとか、吝い物持とかいふと、燒けさうもないところでも燒けるやうな仕掛をする、といふことが書いてあります。これは藤森弘庵の書いた『新政談』の中にも、

近年町火消と申ものも追々風義不宜、近邊に富豪の町人有之候へば其家之方へ火を引、町柄宜しき所は火を引廣、其跡の普請取片付等にて人々是非